平成27年度

日本文化特別演習 報告書

第5号

北海学園大学人文学部

平成27年度

日本文化特別演習 報告書

第5号

北海学園大学人文学部

第1日 2月22日

第2日 2月23日

第4日 2月25日

第5日 2月26日

第6日 2月27日

遭遇した食べ物
(写真：長澤萌さん提供)

平成 27 年度　日本文化特別演習報告

引率教員　中川かず子

今年度で 13 回を数える日本文化研修は、新カリキュラムによる名称変更のため「日本文化特別演習」として初年度を迎えました。日程は 2 月 22 日から 27 日まで 5 泊 6 日間、研修地域は京都を中心に高野山(和歌山)、奈良方面でした。残念ながら今回は参加者が極端に減り、参加人数は最終的には 1 部 10 名、2 部 5 名の計 15 名、それに、寺田吉孝先生と中川が引率教員として一行に加わりました。費用を抑えるために、添乗員を付けず、旅行の手配のみ旅行社にお願いするという初めてのケースでしたが、宿舎の部屋割りで多少の修正を強いられたものの、研修に支障をきたすような交通機関や健康の問題は起こらず、全員元気に日程を終えて戻ってきました。研修日程は以下の通りです。

	月日	研修内容	日　　程	宿　泊
1	2/22(月)	移動／団体研修	新千歳空港(10:45)→関西空港(12:55)→高野山奥の院見学→宿坊（普賢院）	高野山泊（普賢院）
2	2/23(火)	団体研修	朝のお勤め→壇上伽藍、金剛峯寺見学→飛鳥石舞台古墳→飛鳥資料館見学→高速道路経由京都市内へ	京都泊
3	2/24(水)	自主研修	終日自主研修	京都泊
4	2/25(木)	京都御所／自主研修	京都御所参観→各自自主研修へ	京都泊
5	2/26(金)	自主研修	夕刻まで自主研修、研修発表準備→プレゼンテーション（16:00～）→懇親会（19:00～）	京都泊
6	2/27(土)	団体研修／移動	ホテル→国立民族博物館(10:15～12:00)→大阪道頓堀周辺→大阪空港(17:00)→千歳空港(21:00)	

本演習は 10 月にガイダンス、11 月に事前レポート提出、12 月と 1 月に合わせて３回授業及びガイダンスを行ない、グループ分けやグループ内での自主研修内容の計画と準備学習を進めてきました。例年、授業があまり重ならないと思われる土曜日に設定されることが多いですが、学生達によると、土曜日は外国語授業があったり、公務員講座が開講されるなど、スケジュール調整が大変だったようです。そのためか、初回ガイダンス前後から履修をあきらめキャンセルしたり、旅行には参加できるがガイダンスに欠席せざるを得ないという学生もいました。参加者の減少にいくつかの背景事情があるかと思われますが、学生達の意見も聞きながら、事前研修の日程を含めて研修内容と方法を再検討すべき時期に来ているかもしれません。

ともあれ、参加した学生達からは、高校などの修学旅行では味わえない日本文化の体験学習に満足した様子が窺えます。この報告書は彼らの体験した研修のほんの一部を紹介す

るにすぎませんが、研修旅行全体を通して周到に準備し、体験学習した学生達の熱心な姿は引率教員の我々の脳裏に焼き付いています。是非、報告書をご一読いただき、学生達の感動を共有してくださると幸いです。

最後に、人文学部長の郡司淳先生のご支援をはじめ、少人数でも参加費用を削減くださった旅行企画会社（株）ブルーツーリズムの浦口宏之氏のご配慮、報告書の編集を引き受けていただいた寺田吉孝先生のご苦労に感謝を申し上げます。

目次

様々な枯山水庭園	伊藤　翔太	3
研修旅行を振り返って	岩本　沙織	5
東方縁の地、京都を歩く	菅原　悟	7
日本文化特別演習を終えて	鈴木　直人	9
5 泊 6 日の旅行記	外舘　翔太	11
身体で感じた京都の街	高橋　雅人	15
京都で歩む百人一首の世界	高松　梨奈	17
アイドルの源を求めて	長澤　萌	20
京の歴史を巡って	二本柳裕太	27
万城目学『鴨川ホルモー』の舞台を巡る	前田　曜	29
神様と使いの動物達	三好　峻平	32
京の冬の旅と新選組発祥の地	村田　真悟	35
日本文化演習を終えて	山崎　朔夜	38
枯山水の庭を巡る	山田　康太	40
研修旅行レポート	西　理沙	43

様々な枯山水庭園

1部日本文化学科　2年　2714106　伊藤翔太

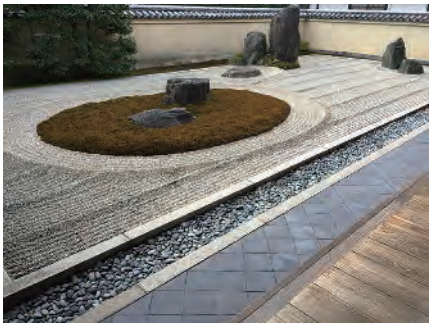
枯山水とは禅宗の作庭様式の一つであり、水を用いることなく砂や石などで山水の自然の生命を表現することを特色とするものである。今回の研修旅行でも多くの枯山水庭園を見ることが出来た。

2日目の高野山金剛峯寺では、蟠龍庭という石庭を見ることが出来た。1150年の弘法大師の御遠忌大法会の時に造園されたとされている。2340平方メートルという国内最大の面積を誇る石庭である。ここでは雲海の中で雄と雌の龍が対をなして奥殿を守っているように表現をされている。雌龍の岩は赤みがかっているのも特徴と見受けられた。蟠龍とは「まだ地面にうずくまり、天に昇らない龍」と辞書にはあり、修行中の僧がこれから大成していくことへの希望のようなものも表現されているのではないかと感じた。

3日目の自主研修ではまず大徳寺に訪れた。大徳寺は鎌倉末期に宗峰妙超が大徳という小さな庵を開き、そこで自身の学徳を広めていったことを始まりとする。その小庵が花園天皇、後醍醐天皇の帰依を受け1326年の法堂の完成と同時に現在の龍宝山大徳寺に命名された臨済宗の寺院である。応仁の乱以後に一休禅師により復興され、豊臣秀吉が織田信長の葬儀を行ったこともあり戦国武将たちが塔頭建立を相次いで行ったことで発展していった。また、村田珠光や千利休などの茶の湯文化とも関係が深く、数多くの茶室も存在する。

ここではまず芳春院という塔頭寺院に訪れた。加賀の前田家と深いつながりをもつ寺院である。ここには花岸庭という枯山水庭園があり、山奥の渓谷から水が流れ、やがて湖に流れ着き、大海に帰るという山水の様子が表現されている。奥には岩や苔で山が表現され、うまく水の流れがあらわされている。湖の部分にある孤立した岩が船のように感じた。本堂が現実の世界にあたり、奥の山がある陸地が理想の世界であり、そこに到達したいということが表れているのではないかとこの石庭では感じた。

続いて宗峰妙超の像も安置されている本坊を見学した。ここの方丈庭園は江戸時代初期の枯山水庭園である。天祐和尚が手掛けた南庭はほぼ白砂であり、ここまで見てきた枯山水とは少し違うものと感じた。奥には2つの大きい岩により滝のようなものが表現されていた。また東側にも小さい枯山水庭園が存在し、そこには手前にのみ白砂に模様がつけられていた。その解釈も様々できそうなものに感じたが、現世とそれとは別の世界を表しているのではないかと感じた。



龍源院一枝坦

最後に龍源院に訪れた。ここには方丈前に一枝坦という石庭がある。この庭には蓬莱山が右側の岩で、左側には亀島が表現され、無駄のない作りである。蓬莱山という不老長寿

の理想の世界がここでも表現されている。

続いて同じく臨済宗の寺である妙心寺に訪れた。ここは 46 の塔頭寺院が存在する京都でも最大の禅宗の寺である。1337 年に禅宗に深く帰依した花園天皇が関山慧玄を開山に迎えたのをきっかけとする。

ここでは玉鳳院という山内では最古の塔頭寺院に枯山水を見ることが出来た。渡り廊下を挟み、大きく南北に分かれ北側には枯滝や石組、南側には一面の白砂に松や敷石が配置された庭が広がるものであった。

次に訪れたのは龍安寺である。ここはもともと徳大寺家の別荘であったものを 1450 年に細川勝元が譲り受け寺とし、妙心寺の義天玄承を開山として迎えたのを始まりとする。ここの石庭は 1500 年ごろのものとされ、一面に白砂が敷かれ、15 個の石を配置したものである。この石はある場所からでなければすべてを見ることが出来ないとされている。この石庭の解釈は謎に包まれているとされ、見た人間の自由な解釈にゆだねられているものとして有名である。陸地と思われるものや、山のようなものも特になく、石の配置もバラバラに見える。これは自分なりの解釈だが、庭の部分だけを見るのではなく背景や土塀も含めて眺めるのではないかと考える。木々は四季によって変化をみせ背景を変える。また塀も菜種油が混ざっており時の経過とともに変化を見せるものである。これによりこの世のものはすべて移り変わっていくものということを表し、見るものに現在の自分を見つめるということを要求しているのではないかと感じた。

龍安寺石庭

枯山水庭園はそれぞれによって異なる形式や景観を見せるものである。それが表現する解釈も存在するが、基本的には見た者それぞれが感じる世界があるものではないかと考える。今回は感覚的に見て感じることが多かったのだが、仏教やそれぞれの寺の知識などもふまえてから見るとまた違う角度から考察が出来るように思う。

研修旅行を振り返って

2部日本文化学科　2年　2814102　岩本沙織

〈はじめに〉

高校の修学旅行で初めて京都に行ったときから京都の雰囲気や町並みが好きで、何度か京都へ行っている。今回は研修旅行ということで、一人で行くときとは違う発見や見方ができたのではないかと思う。以下、自主研修の三日間を振り返り、一日ずつまとめていく。

〈2月24日　自主研修一日目〉

自主研修では、「森見登美彦の作品を歩く」「異世界に触れる」の二つをテーマとした。

森見登美彦の作品は、京都を舞台にすることが多く、中でも今回の研修旅行では『森見登美彦の京都ぐるぐる案内』(2014年、新潮文庫)がとても参考になった。森見氏の作品に出てくる京都の名所を中心に紹介されていて、この一冊があれば作品の世界観を味わうことができる。

二つ目のテーマである「異世界に触れる」とは、普段の生活で神社や寺に行く機会は一年に数回あるくらいで、この機会に異世界(神社や寺に行く機会が多くない私は、このように表現する)をより深く感じたいというものである。

自主研修一日目は神社と寺を中心にまわり、まず初めに晴明神社へ行った。安倍晴明を祀っている神社で、魔除け・厄除けの果実と言われている桃の像があり、厄除桃と言われている。今回の旅行で寺社を多くまわる予定だったため、御朱印帳を買った。寺社によって御朱印が違うので、寺社に行く際の楽しみの一つにもなる。

次に仁和寺、龍安寺へ行った。古文「仁和寺にある法師」で名前は知っていたが、実際に行ってみて歴史を感じることができた。

最後に野宮神社へ行った。竹林の中にあり、自然を感じることができる。縁結び、子宝、学問の神様がいるとされている。

〈2月25日　自主研修二日目〉

自主研修二日目は、全員で京都御所へ行ったあとに水路閣へ行った。右の写真からもわかるように、どこか外国にいる気分にさせてくれる雰囲気である。水路閣は、明治18～23年の疏水事業の際につくられた水路橋で、西欧技術が導入されて間もない当時、日本人のみの手で設計、施工されたため、とても貴重なものだという。

次に、若王子神社から銀閣寺まで続く散歩道である哲学の道を歩いた。道のそばには、

たくさんの木が並んでいたため、春になると桜を楽しみながら歩くことができるだろう。

次に、六道珍皇寺へ行った。平安時代に創建された寺で、薬師如来坐像や閻魔大王像、冥界へ通ずると伝わる「冥土通いの井戸」「黄泉がえりの井戸」がある。絵の説明もしてくれるため、より深く理解することができる。

次は、縁切り縁結びで有名な安井金比羅宮へ行った。縁切り縁結び碑には多くの形代が貼られていて、こんなにも願う人がいるのかと驚いた。

最後に、外国人観光客人気スポット一位の伏見稲荷大社へ行った。今回の旅行では、行く先々で外国人観光客を見たが、人気の場所なだけあって夕方に行ったにもかかわらずたくさんの人で溢れていた。千本鳥居(写真右)も迫力を感じ、異世界にいるような感覚になった。

〈2 月 26 日　自主研修三日目〉

自主研修三日目は、午後からプレゼンテーションの準備があったため、多くの場所に行くことはできなかったが、まず、下鴨神社へ行った。正式には賀茂御祖神社(かもみおやじんじゃ)と言い、鴨川の下流にあることから下鴨神社と呼ばれているという。また、干支のお社もあり、縁結びの神社としても有名である。

次にフルーツ大福のお店、養老軒へ行った。一口で食べられそうなほどの大きさだが、値段は少々高い印象を受けた。だが、食べてみると中に丸ごと入ったフルーツがとても瑞々しくて、この値段でもまた食べたいと思うほど美味しい。雑誌やテレビでも話題になっていて、とても気になっていたため、この機会に行けてよかった。

最後に、おみくじが当たると友人から聞いて行ったのが八坂神社である。恋愛・縁結びのパワースポットとしても有名で、その理由の一つに大国主命が祀られていることが挙げられる。大国主命は出雲大社でも祀られていて、出雲では年に一度、八百万の神が集まって縁結びの会議をするという話で知られている。その大国主命の力にあやかろうということで、縁結びで有名になったのである。私もおみくじを引いてみたが、確かに当たっている気がした。ただ、凶を引いてしまったのが残念である。

〈おわりに〉

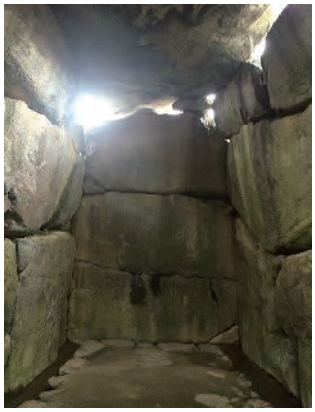
今回の研修旅行で、日常の生活では行くことのないような神社や寺をたくさんまわることができ、それぞれ違う雰囲気を感じることができた。また、私の好きな小説『四畳半神話大系』(2005 年、角川文庫)に出てくる場所にも行くことができて、作品の世界観を少しだけだが味わうことできた。今後、京都へ行く機会があれば、森見氏の違う作品に出てくる場所にも行こうと思う。

東方縁の地、京都を歩く

1部日本文化学科　2年　2714148　菅原悟

研修テーマは京都にも関わりのある『東方 Project』でしたが、それを含めなくても京都という場所自体が楽しいと思っていたので、今回の研修旅行にはかなり乗り気で臨みました。

初日は高野山に行き、ガイドの人から卒塔婆の話を聞きました。卒塔婆はそれ一つで宇宙を表しているそうで、それを踏まえるとお墓の見かたも何となく神秘的に見えました。その後は近くにあった普賢院にて精進料理を頂きました。皆は美味しいと言っていましたが、正直な所私には美味しいとは思えませんでした。食事を終えたらそのまま普賢院に宿泊しました。僕はお寺に泊まった経験がなかったので多少は不安があったのですが、いざ泊まってみると炬燵などの暖房器具も設置してあり、快適に過ごせました。



二日目はまず、朝のお勤め体験から始まりました。非常に寒かったので眠気が覚め、爽やかな気分で一日の始まりを迎えました。朝食を食べ終えたら、檀上伽藍に行きました。中でも、襖に描かれた美しい日本画には思わず目を惹かれました。その後は、飛鳥・石舞台古墳や、飛鳥資料館に行きました。

三日目は自主研修の一日目です。この日はまず宇治方面の橋姫神社に行きました。しかし神社とは言うものの、実際に行ってみるととても小さい神社で拍子抜けしました。橋姫神社でのお参りを済ませると、今度は近くにある平等院に行きました。平等院は人気な観光スポットであり、その日も外国人らしき観光客が大勢いました。特に中央にある鳳凰堂が人気で、そこだけ入場制限が設けられている程でした。その後は墨染寺に行ったり、なんとなく立ち寄ったよく知らない神社（藤森神社）で野良猫と触れ合ったりして、その日の研修を終えました。

四日目は自主研修の二日目です。この日は朝起きると、最初に京都御所に行きました。午前九時という早めの時間に行ったのですが、この時間帯でも観光客は沢山いたので、京都御所の人気が窺えました。京都御所での見学が終わると、バスで六道珍皇寺に行きまし

た。ここには荘厳な閻魔様の像があり、一見の価値はあると思わされました。その後は引接寺と上品蓮台寺に行きました。上品蓮台寺は綺麗な桜の木があるのですが、この時期には流石に咲いていませんでした。しかし、近くにあった梅の花は咲いていたので、良い思い出になりました。この日の最後には下鴨神社に行きました。下鴨神社はとても広いうえに社も沢山あって、歩いて回るのに苦労しました。その分観光客も多く、中でも縁結びの神様を祭る相生社は若い女性やカップルが次々と吸い寄せられる人気スポットでした。

五日目は自主研修三日目です。この日は朝六時に出発し、竹林の小径に行きました。早い時間帯に行ったため人通りは少なく、快適な道中だったのを覚えています。そして竹林の小径に着くと、まるで異界にでも来たかのような、そんな不思議な空間でした。この日は短いですがこれで活動を終えています。

六日目には大阪に行きました。大阪に関しては何も調べていなかったので緊張しましたが、スマホのおかげで道に迷ったりせずに済みました。たこ焼きを食べたり、大阪特有のジョークグッズを見ていたりすると、すぐに帰る時間になりました。名残惜しい思いをしながらも帰路につきました。

全体を振り返ると、やはり京都は面白い場所でした。民家の半数近くは瓦の屋根だったり、バスが多すぎて紛らわしかったり、いたるところに神社やお寺があったりと、同じ日本に住んでいても文化が結構違っているのが強く印象に残っています。事前に入手した情報が正しかったり、逆に間違っていたりもしましたが、それもフィールドワークの醍醐味です。最終的に、行って良かったと思える研修旅行でした。

日本文化特別演習を終えて

1部日本文化学科　2年　2714149　鈴木直人

今回の日本文化演習を改めて振り返ってみると、高野山や京都御所をはじめとして、京都での自主研修、大阪の国立民族学博物館など本当に多くの貴重な史料、お寺、神社、遺跡などを見て、聴いて、触って、嗅いで、感じて、想像して、大変有意義な学習をできたことがうれしく、まず、寺田先生と中川先生、旅行会社の方に感謝の気持ちでいっぱいです。

今回の日本文化演習で一番インパクトが大きかったのは、初日の高野山の奥の院と宿坊だった。樹木の中の、お墓やおもかる石、仏像などの歴史の重みや神秘性の素晴らしさは言うまでもないが、私自身が最も驚いたのが、弘法大師空海は死んだのではなく生きたまま仏となり、今もまだそこにいるので、毎朝食事を届け、なおかつ届けに行く前にその食事の出来具合を確認する別の神様もいて、この決まりを長いこと守りつづけているという点である。このことは、継続することの大切さや弘法大師空海が多くの人の心の拠り所や支えになり続けているということを物語る習慣なのだと思う。そしてこの習慣は、これから先も高野山奥の院があり続ける限り続いていくのだと私は考える。

京都での自主研修で最も興味深かったのは三十三間堂であった。演習の 5 日目のグループワークのプレゼンテーションでも題材にしたが、120 メートルの間に 1000 体の等身立像がずらりと並ぶ光景はまさしく圧巻であった。そして中央に位置する「十一面千手千眼観世音」（中尊）は巨大で、等身立像とは大きさがあまりにも対照的でこのコントラストが大変おもしろかった。創建当時は五重塔などがある本格的な寺院で朱塗りの外装であったが、1249 年（建長元年）の火災で焼失してしまった。しかしそれでも、1266 年（文永 3 年）に再建された本堂が 750 年守られてきたというのは本当に素晴らしく、価値が高い。等身立像を横目に歩いていると 20 メートルおきぐらいで洗浄代の賽銭箱があり、1000 体の等身立像と巨大な「十一面千手千眼観世音」の保存状態を維持するのは本当に大変なことであると改めて実感できた。また訪れる機会があれば、次は新春の風物詩となっている 1 月 15 日に行われる「通し矢」（大的全国大会）の見学をしてみたい。成人を迎えた晴れ着を着た女性たちが弓を射抜く姿は爽快で可憐であるのかなと思う。

次に、強く印象に残ったのが伏見稲荷大社である。私は日本文化演習に行く前の下調べの時点で、伏見稲荷大社が 2014 年と 2015 年に 2 年連続で「行ってよかった外国人に人気の日本の観光スポット」第 1 位を受賞していることが非常に興味深く、今回訪れる時に外

国人になぜ人気なのかという視点からも見てみたいと考えた。約800基ある朱色の「千本鳥居」が頂上までただひたすら連綿と続いていく神秘的な光景に魅了される外国人が多いのはもちろんだが、それに加えてアクセスの良さと満足感が大きいのではないかと思う。日本語がわからない外国人が目的地に行くのは本当に大変なことであるが、伏見稲荷大社は京都駅からJR奈良線に乗り2駅で稲荷駅に着き改札を抜けると到着である。外国人が京都旅行の日程を考えるときに本当に組み込みやすいのだと思う。満足感の大きさについては言うまでもないと思うが私個人としては、屋台がいい味をだしているなと感じた。

金閣寺と清水寺はやはり素晴らしく、金閣寺の美しさ、清水寺のスケールは文句のつけようがないが、バスガイドさんの話にもあったとおり、外国人観光客の多さとには驚かされた。落ち着いて見れないという思いは私も抱いたが、同時に、しょうがないことだと思う。

私がもう一度行きたいと思うのは、祇園と花見小路、そこからの安井金毘羅宮というルートである。この辺の街並みの雰囲気の良さには本当に惹きつけられるし、花見小路の舞妓さんが勤めるところは私が訪れた昼過ぎには当然まだ閉まっておりひっそりとしていて、夜のにぎわいを想像してみるのがおもしろかった。花見小路が歩行者天国でない点もいいと思った。運転している業者さんにとっては、写メや自撮りに熱中している若者は邪魔な存在なのだろうと思うが、極力クラクションを鳴らさずにゆっくりと避けていくドライバーさんが多いという点も気になった。安井金毘羅宮といえば、悪縁を切り良縁を結ぶ神社として全国的にもよく知られている神社だと思うが、私が訪れたときも女性がほとんどで、男性はあまりいなかった。安井金毘羅で有名なのが縁切り縁結び碑だと思うが、調べてみると、高さ1.5メートル、幅3メートルで中央の亀裂を通して神様のお力が円形の穴に注がれているらしく、まず、本殿に参拝した後で、次に「形代」（かたしろ）という身代わりのお札に願い事を書き「形代」を持って願い事を念じながら碑の表から裏へくぐって、まず悪縁を切り、次に裏から表へくぐって良縁を結び、最後に「形代」を碑に貼って、御祈願は完了する。私自身、今回の日本文化演習でこの方法を知らずにやらなかったので、次に訪れたときにはしっかりと全力でやりたいと思う。

今回の日本文化演習で最も印象に残り、ぜひもう一度行きたいのは高野山奥の院と普厳院であったが、その他にも飛鳥資料館での山田寺の仏頭などあまりにも貴重な史料を見学させていただき、大阪にも行くことができ、本当に有意義な日本文化演習だった。

5 泊 6 日の旅行記

2 部日本文化学科　2 年　2814119　外舘翔太

はじめに

このレポートは、他の人のものと比べるとおよそレポートといえるようなものではないことを先に述べておく。これにはいくつかの理由がある。まず一つ、私自身のテーマは当初、京都の「洋」を中心として「和」と比較することによって京都という地について何かしらの知見を得ることであった。しかし、この目論見は私自身の感性によって目的を失ってしまった。洋館を観て、私が感じたことは「思ったより普通」で、「写真と変わらない」というありきたりな感想であったからだ。そのようなものを研修期間において真摯に、丁寧にみたとしても、決して立派に文章化することは適わない。むしろ体裁だけ整った中身の無い行儀の良い文章が出来上がるだけである。それならば、私自身が好きなものをテーマにしたほうが自身にとっても良いと考え、急ではあるが「京都のお酒」をテーマとした研修旅行へと変えた。そして、このレポートには主観が大いに含まれ、私の感性によって得たものを文章化しているという点がレポートとしては相応しいとは言えない。このことはレポートとしては不完全であるが、一方である特定の読者に対しては影響を与えることが出来るのではないかと考えている。それは、来年度以降、この研修旅行へ行こうかと考えている人々に対してである。自身の感性によって得られたものを、半ば告白に近い形で正直に書くことは、加工されていない生の声として直接的に参加を考えている学生に対して届くのではないか。また、レポートとして適切なものならば、他の方々が書いてくれていると、5 泊 6 日の短い間ではあるが時間を共有したものとして確信している。故に、私は私自身の言葉で、旅行記のようなものを書こうと思っている。

本文

私は、中学校・高等学校と修学旅行に無縁の人間であった。何故ならば、私にとって修学旅行は金のかかる無駄な出費程度の認識であったからだ。しかし、今回この研修旅行へと行こうと決心した理由は一重に単位が出るという点に尽きる。そのような打算的な理由で行くことにした研修であっても、1 月末から 2 月頭までの定期試験が終わると焦りに駆られた。私はその時まで何も考えていなかったからだ。はじめての旅行だというのに無計画である。今から考えると、この時に気づいておくべきであった。計画されたものに則って行動する方が、自身のためになるということを。その時の私は、現実逃避をし、中途半端に出来上がった計画を携えて研修へと旅立つことになってしまった。

実は当日まで、飛行機どころか一人で JR にも乗ったことがなかった。心配症な私は、家を早めに出て集合時間より 1 時間早い 8 時 30 分に新千歳空港に着いた。そこからは無事に合流し、少しテンションが高くなりながら飛行機に乗り込んだ。飛行機は快適だった。飛び立つ時、旋回するとき、雲を突き抜けるときは少し揺れたが不思議と不安にはならなか

った。普段の地下鉄やバスではあまり自覚したことはなかったが、ここに乗っている人たちの命は全てパイロットが背負っているのだなと感じた。顔も知らぬ人に命を預けているのが不思議な心持になった。

関西空港へと着陸した。確か 10 分か 15 分くらいの遅れがあった。外に出るまでは北海道にいるような感覚が続いていたが、地面に雪一切ない風景を見ると、飛行機が飛んでいる間に季節が変わってしまったのかという冗談を考えつつも、本州に来たということを実感した。そして、予定と異なりバスガイドさんが居た。見るからにバスガイドだった。それ以外の言葉を当てはめられるのを拒否しているかの如くバスガイドだった。バスの中では、途切れることなく言葉が並べられ、内容だけではなく、イントネーションにも新鮮味を覚えた。私はここで「はんなり」と言う言葉を知った。覚えた。肌で感じるのは京都へ行ってからである。

初日の宿舎は高野山の宿坊であった。私は初日が一番憂鬱であった。寺の宿坊のイメージが甚だ汚いものであったからだ。汲み取り式のトイレの可能性まであるとさえ思っていた。宿坊がある高野山へ続くくねくねとした細い道をバスが登るときに覚悟は決めた。しかし、着いてみると予想と違い、綺麗な場所であった。自分の家より綺麗だった。部屋には暖房に加えてこたつまで備えられている。トイレはしっかり水洗式であり、大浴場まで完備されていた。さらに、食事である。夕食は精進料理にて、と書かれたプリントは不安感を唆っていたが、実際に出された料理は豪勢なものであり、毎日でも食べ続けられると思った。

Figure 1 夕食の精進料理

二日目の朝は早かった。朝 7 時には本堂お参りというお勤め体験があったからである。お坊さん達の心地の良い声が本堂に響き渡り、不思議と心が落ち着いた。寝起きで何も考えられなかったこともそれを助けたように思う。印象的であったのが見習いの方が本を手にして読んでいたことである。他のお坊さんは皆暗誦していた。見習いの方は私より一回りも二回りも年上に見えたが、それでも暗誦できていないということは、他の方々はどれほどの修行を重ねたのだろうと疑問に思った。しかし、体験ということで、途中退出したため、修業年数を聞くことはできなかった。その後には飛鳥村へ行き、人生ではじめて古墳をみた。石舞台古墳は内部にも入ることが出来るようになっていた。石と石が絶妙に咬み合っており、何かの拍子で崩れてしまうのではないかと怖くなってすぐ出てしまった。そして二日目からの宿舎はザ・パレスサイドホテルという京都御所の西側にある交通の便の良いホテルだった。ホテルに着いて自由時間になったのは 18 時過ぎだった。当初の予定には班で行動することも、外へ出ることも無かったが足取り軽く京都の街へと繰り出した。札幌より少し背の低い街でみるもの全てが輝いていた。錦市場は多くの店が閉まっていたが、たこ焼き屋が遅くまで営業していた。6 個で 200 円という価格にも驚いたが、味にはもっと驚いた。今まで食べていたたこ焼きと全く別物だったからだ。カリカリ博士という店

名に反してトロトロ系のたこ焼きは舌の記憶にこびりついている。このお店には 2 回行った。もう 1 度行こうとしたが、流石に同じものばかり食べるのは芸が無いと思いやめた。

三日目は自由行動だったので、伏見の方まで行った。地下鉄の一日無料券を 500 円か 600 円で買ったが、あくまでも京都市営地下鉄が乗り放題であり、近鉄は対応していなかった。そのため、少しだけ移動費をけちって市営地下鉄の最後である竹田駅まで乗り、そこから歩くことにした。知らない街を、自分の意志で、ゆっくりと、眺めながら歩くのは幸福に包まれると同義であった。京都の街は一度も来たことがないのに、どこか懐かしさを漂わせていた。北海道より狭い道が家と家との距離を狭くして、その家の造りは木造の瓦屋根。それが私にはなぜか昔みたような愛おしさを感じさせる理由なのではないかと思った。

目的の伏見の酒には無事に辿り着けた。訪問した所はキンシ正宗本社、玉乃光酒造、おきな屋、キザクラカッパカントリー、月桂冠大倉記念館などである。キンシ正宗本社と玉乃光酒造は両方共工場で、中身は見学できなかったが、併設されている小さな店でお酒を買うことが出来た。平日ということで誰もいなくて店員さんも和やかな対応をしてくれた。おきな屋は北川本家という酒造の直営店で、入るやいなやバリバリの方言で話しかけられた。かなり癖が強い方言で何を言っているのか殆どわからなかったが、とにかく試飲をしていけと言っているようだった。8 種類くらいを立て続けに飲ませてくれたが、合間に入ってくる解説は方言だけではなく専門用語や固有の土地名も加わり難解なものである。録音しておけば良かったと後悔している。聞き取ることが出来たのは、試飲をして気に入ったものだけを買えばいいということだけだった。そしてこのお店で衝撃だったのが蛇口からお酒が出てきたことである。子供の頃に夢にみた学校の蛇口からジュースが出てくればいいのにという願いが、こんな遠くの地で果たされているとは思いもしなかった。大変美味しゅうございました。

Figure 2 蛇口から出てくるお酒

お昼ごはんはキザクラカッパカントリーへ行った。ここではビール飲み比べが出来るセットが有り、ずっと楽しみにしていた。一方で食事の方は未決定で、その場で選ぼうと思っていた。だし巻き卵定食や寺田屋に因んだ竜馬御膳、きらびやかな華御膳など和食が並ぶ中で、私は日替わり定食なるものを選んでしまった。まさか洋食のハンバーグ定食が出てくるとは思っていなかった。お酒は飲めたので満足したが、もし旅行先でご飯を食べることになった際には変な挑戦はせずに無難なのを選んでおくべきということを私の後悔をもとに記しておく。

Figure 3 昔の酒造りジオラマの一部

月桂冠大倉記念館では個人の客が少なかった印象がある。自分以外は団体であり、丁寧なガイドのもと、ひとつひとつ丁寧に説明されていた。私はそれを横目に見ながら、耳を傾けていた。観光向けであるからか標準語で非常にわかりやすい解説だった。昔のお酒の作り方のジオラマは、

予備知識無しでも楽しめた。無論、試し飲みもした。

全ての酒造に通じることはやはり「伏水」をプッシュしていたことである。これは伏見の水ということであるが、伏見の水は美味しいということがどこへ行っても書いてある。その根拠は曖昧だが、酒と水は切っても切り離せないものであり、酒が美味しいということは水も美味しいという論理のもとから生まれたのではないか。

四日目は全員で京都御所を見たあとに自由行動だった。神戸へ行くことにしていた。JRで移動したが、陸続きで別の県があることに違和感を覚えた。神戸の街並みは京都の「和」の雰囲気とも異なっていた。特に旧居留地には洋風な高貴さがあった。見る店は全て高級ブランドであり、自分の居場所ではない雰囲気だった。好き嫌いで言えば、間違いなく京都のほうが好きで過ごしやすい空気だった。しかし、海の見える神戸ポートタワーは良い景色だった。神戸を一面に上から見ることで何となく街を理解したような気分になれるところなので、困ったら行くべきところだと思う。

Figure 4 神戸ポートタワーからの景色

五日目も自由行動だったが、文字数の都合上ここではどこへという場所だけ記しておく。北野天満宮から金閣寺へ行き、そのままホテル方面へと徒歩で下って行った。

最終日は国立民族学博物館へ行った後に大阪の道頓堀に行くことになっていた。国立民族学博物館は制限時間が短く 1 時間 30 分の時間中に満足にみることが出来なかった。さまざまな国の文化を象徴したものがおいてあり、展示の仕方にも工夫があり、細部まで目を凝らすと一つの場所で 1 時間以上過ごしてしまいそうになった。今回の研修でもう一度訪れたい場所を一つ挙げるのならば、不完全燃焼感がある国立民族学博物館である。

そして道頓堀は騒がしい場所だった。人が多くて、声が大きくて、思うとおりに歩けなくて、私には京都が懐かしく思われた。

帰りの飛行機は名残惜しさがあった。飛行機の中では、ずっと日記を書いていた。この 6 日の記憶が頭の片隅に追いやられてしまうことが怖く、記憶を記録へと変換する作業が必要だったからだ。その試みはこのレポートによってある程度は達成できたと思う。

終わりに

何の計画性も無しに行った研修だったが、私にとって人生の転機になった 6 日間となった。日本がまだまだ広いことを知れたし、もしかしたら自分の街すら詳しく知らないのではないかと再認識するきっかけになった。そして、北海道しか知らない男が京都に行って一人で観光するだけでも、充実したものだったが、しっかりと計画を練るともっと京都の奥深さを知ることが出来たのではないかなと思う。

身体で感じた京都の街

1部日本文化学科　2年　2714153　高橋雅人

今回の日本文化特別演習で印象に残ったことを述べていきたい。

まず一日目は高野山の宿坊である普賢院で精進料理をいただいた。自分の中の精進料理のイメージそのままの料理が出てきた。味は正直普通だった。宿泊する部屋は暖房が効いていて暖かく、広くてとても居心地のいい場所だった。

二日目は朝のお勤めを体験させていただき、とても貴重で良い経験となった。

三日目からはついに京都での自主研修を行った。自主研修初日で印象に残った場所は、何といっても伏見稲荷大社である。千本鳥居の壮大さはすごかった。テレビやインターネットの画像でみるのとは全く違った。今回の自主研修で最初に訪れた場所だったが、一番衝撃を受け、感動した場所であった。最終的には最高峰まで登ったが、順路がわかりづらく、苦労したが、それもこの伏見稲荷大社の醍醐味なのかな、と感じた。

伏見稲荷大社の千本鳥居

三十三間堂

4日目の自主研修二日目で印象に残った場所は三十三間堂である。本堂の中には計千体にも及ぶ等身観音立像と、それらに囲まれて千手観音坐像がありものすごい迫力に圧倒された。この場所に数十分間は見入ってしまい、時間を忘れるほどだった。写真を撮りたかったが、残念ながら撮影禁止だったので記録に残すことはできなかったが、しっかりと目に焼きうつして堪能した。

その後は金閣寺を訪れてから下鴨神社へと向かった。この下鴨神社は縁結びなどでも有名であるが、正直そこまで期待はしていなかった。だが、実際にその場を訪れてみるととても良い場所だった。本殿へと向かう道には、糺の森が広がっているのだが、私はこの場所がとても印象に残った。この下鴨神社は、都会の住宅街にポツンとおかれている神社なのだが、周りの景色とは打って変わって、糺の森はとても大きな樹々がたたずんでいる。糺の森に一歩踏み入るだけで、何かパワーをもらえたような気がした。今回は時間がなくあまりゆっくり滞在することはできなかったが、時間をかけてゆっ

下鴨神社の糺の森

くりと散歩をしたいと思うスポットだった。その後も京都の街並みを眺めながらいろいろな場所を散策し、この日は本当に濃い一日となった。

祇園

五日目は、主に祇園周辺を散策した。祇園から花見小路という道に入ることができるのだが、ここは舞妓さんがおもてなししてくれるようなお店がたくさん並んでいる。どこを見渡しても“THE 京都”というような風景で特に何があるわけではなかったが、かなりの時間散策できた。ただ一つ残念なのは花見小路を歩いていれば、舞妓さんがたくさん歩いているというイメージを持っていたが、見つけたと思っても観光で舞妓さんの体験をしている人ばかりで、本物の舞妓さんはめったに現れないようだった。一人だけ本物の舞妓さんを見かけたが、とても急いでいる様子で、お店に駆け足で入って行ってしまった。舞妓さんと一緒に写真を撮るというのも目標の一つだったが、達成できず残念だった。

最終日は、京都ではないが道頓堀を訪れ、串カツ、たこ焼き、焼きそばを食べた。大阪に小学生の時に住んでいたが、道頓堀を訪れたのは初めてで、いつもテレビなどで見ていた場所だったので感動した。串カツはおすすめされて入ったお店で食べたのだが、少々お高めの値段設定で、入ったことを少し後悔したが、めったに食べられない本場の串カツであるし、もちろんおいしかったし値段のことは忘れて、たらふく食べた。

この関西研修旅行はとても有意義な旅行にすることができた。今回かなりじっくりと京都の街を散策することができたが、行けなかったところはまだ数え切れないほどあるので、絶対にまた来てみたいと思える場所だった。北海道と全く違う街並みが広がっており、街中にお寺や神社があるという光景も新鮮で面白かった。寺田先生や中川先生をはじめ、旅を共にした皆のおかげでとても楽しかった。

京都で歩む百人一首の世界

1部日本文化学科　2年　2714156　高松梨奈

2月22日から27日の5泊6日で日本文化特別演習が行われた。私はその中でも、24日から26日の3日間に行った自主研修について記していこうと思う。私は今回、『小倉百人一首ゆかりの地を中心に京都の文化をめぐる』というテーマで京都各地を散策した。大まかなタイムスケジュールは次のとおりだ。一日目は嵐山方面をおもにめぐり、二日目は京都御所付近から清水寺、伏見稲荷などをめぐり、三日目は伏見方面を訪れた。次からは行った場所をテーマごとにまとめて記す。

夢舞台「天徳内裏歌合」

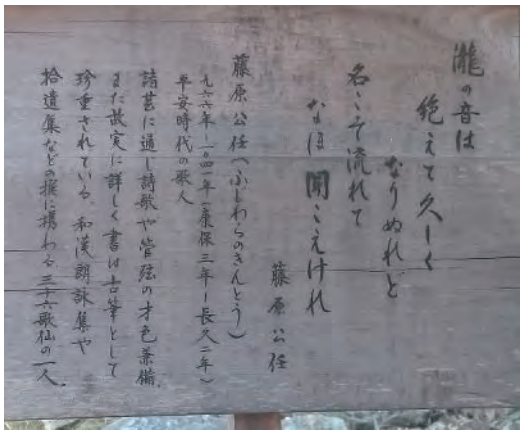
まずは百人一首のミュージアムである時雨殿、私が自主研修で最初に訪れた場所だ。やはり百人一首ゆかりの地をめぐる前に、ここである程度知識をつけてから回るべきだろう。時雨殿は嵐山の大堰川のそばにある。百人一首の多様な世界を「見て」「感じて」「学ぶ」ミュージアムである。主な展示室は1階にあり、藤原定家の日記『明月記』やかるたなど百人一首にまつわる貴重な資料が展示されている。名物となる展示は歌仙人形と夢舞台だろう。歌仙人形は、歌仙絵を忠実に再現した100体の歌仙人形の展示である。それに加えて読み下し文や歌人のプロフィール、歌碑（後述）の場所が記されている。ジオラマで作られた夢舞台は歌の場面や宮中の生活を華麗に再現する。今回展示されていたのは「天徳内裏歌合」（960）と百人一首第6番の歌「かささぎの渡せる橋におく霜の白きを見れば夜ぞふけにける」（中納言家持）の世界の再現だ。後述の舞台は四季によって変化する。今回は冬の歌、中国の七夕伝説の「かささぎの橋」と「白い霜」が織り成す神秘的でいて幻想的な一句である。まるで平安時代にタイムスリップしたかのような気分が味わえる。私が当館で最も気に入った展示だ。時雨殿は百人一首が好きな者はもちろん、初めて百人一首を知るといった者にもおすすめの場所だと思う。百人一首についてよく分かり、さらに好きになることができる場所だろう。時雨殿の付近には百人一首に含まれる全ての歌の歌碑が5つの地区に分けられて設置されている。まず一つ目の地区、時雨殿を出て渡月橋を渡った嵐山東公園にある嵐山東地区には、千載集の句14首、金葉集の句5首、続後撰集の句2首、計21首がある。二つ目の地区、時雨殿のすぐ近くの亀山公園内にある亀山地区には、拾遺集の句11首、古今集の句24首、後拾遺集の句14首、計49首がある。三つ目の地区、亀山公園を抜けて竹林の道の先にある奥野々宮地区には、後撰集の句7首がある。四つ目の地区、野々宮地区は奥野々宮地区のすぐそばにあり、新勅撰集の句4首がある。そして最後に五つ目の地区、長神の

杜地区は常寂光寺を越えたところの長神の杜内にあり、新古今集の句 14 首、詞花集の句 5 首、計 19 首がある。私は全地区を訪れ、歌碑を一つ一つ巡った。嵐山東地区と亀山地区は順路が定められていなかったため、すべての句をめぐるのになかなか苦労した。しかし、自分の足で全てめぐり終わったあとにはかなりの達成感が体中を巡った。いろいろな意味で貴重な経験が出来たと思う。しかし、この歌碑巡りに思っていたよりも多くの時間を割いてしまったことはかなりの誤算である。

歌碑　写真は藤原定家のもの

次に百人一首歌人でもあり、その撰者でもある藤原定家ゆかりの地について示す。まずは常寂光寺、藤原定家の木像を安置する歌仙祠、定家の山荘があった近くに建てられた時雨亭を有する。次に定家が百人一首を編集した時雨亭跡地があったと考えられている小倉山内にある二尊院（小倉山は後述の歌の詠まれた地でもある）、最後に定家の墓を有する相国寺がある。百人一首が生まれた地やかつて定家が過ごした地を巡るのには感慨深いものがある。これらの地区の周辺は外国人観光客が多数訪れていた嵐山地区に比べて静かでゆったりとした時が流れていた。

百人一首の歌の舞台となった地も巡った。まず一つ目、百人一首第 26 番「小倉山峰のもみぢ葉心あらば今ひとたびのみゆき待たなむ」（貞信公）の句が読まれた地は先程も述べた小倉山（二尊院）だ。今回訪れたのは春に近い冬であったため、ぜひ今度は秋の小倉山の、天皇に見せたいほど非常に美しかったという紅葉を見てみたいものである。二つ目、百人一首第 55 番「滝の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ」（大納言公任）の句が読まれた地は、大覚寺のとなりの大沢池にある名古曽の滝跡だ。名古曽の滝跡にはかつて滝があった面影はほとんどない。しかしその名だけは石碑に刻まれ、公任の歌と共に現在まで語り継がれている。この歌のそのままの情景がそこにはあった。



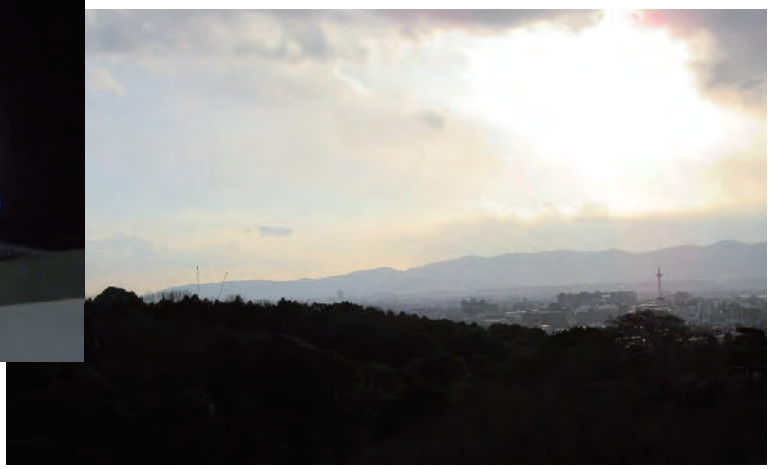
名古曽の滝跡

最後に百人一首の歌人たちゆかりの地について示す。11 番の歌を詠んだ参議篁（小野篁）ゆかりの地として、引接寺（千本えんま堂）と六道珍皇寺を巡った。小野篁はあの世とこの世を往来する神通力を有し、閻魔大王に仕えていたという伝承を持つ。そんな小野篁に

多くの人で賑わう北野天満宮

関連する寺にも伝承が残っている。引接寺には地獄に落ちた紫式部を小野篁が救った伝承が、六道珍皇寺には小野篁があの世とこの世への往来を行った「冥土通いの井戸」と「黄泉がえりの井戸」が残る。24 番の歌を詠んだ菅家（菅原道真）ゆかりの地として、北野天満宮と菅原院天満宮を巡った。北野天満宮は学問の神様として菅原道真を祀り、「北野の天神さま」の名で多くの人々に親しみを持たれている。私が訪れた 25 日はちょうど梅花祭が行われていて多くの人で賑わっていた。道真が愛でた梅も見事に咲き誇っていた。菅原院天満宮は道真が生まれた地であり、道真の産湯に使用した井戸がある。56 番の歌を詠んだ和泉式部ゆかりの地として、誠心院がある。商店街のど真ん中にあったため驚いた。57 番の歌を詠んだ紫式部ゆかりの地として、廬山寺と梨木神社、野宮神社を巡った。廬山寺は紫式部の邸宅があったとされる地で、紫式部の歌碑もある。梨木神社と野宮神社はともに紫式部の作品『源氏物語』のゆかりの地とされている。62 番の歌を詠んだ清少納言ゆかりの地として彼女が訪れたという清水寺がある。清水寺は京都で有名な観光スポットのひとつであり、多くの観光客で賑わっていた。86 番の歌を詠んだ西行法師ゆかりの地として、西行の名前を冠す西行井戸を訪れた。西行の歌碑を眺めた。

私がこの自主研修で最も印象に残っているのは百人一首の歌碑巡りである。最も多くの体力と時間をかけた。たくさんの百人一首に関連する地をめぐって、百人一首の知識も増え、さらに百人一首が好きになった。自分の足で実際に歩くのは、授業で学んだり写真を見たりするのとはまた違っていて非常に面白かった。



アイドルの源を求めて

１部日本文化学科　３年　2713169　長澤萌

たくさんの楽しみと不安を抱えて迎えた日本文化特別演習が終わってしまった。正直に言うと、５泊６日を慣れない土地で、しかも知り合ったばかりの人たちと過ごすということから、私は不安の方を多く感じていた。しかし同じ班のメンバーはもちろんのこと、この演習に参加していたのは良い人たちばかりで、引率の先生方も優しく、天候にも恵まれ、自分自身は体調を崩すこともなかったので、本当に楽しく充実した時間を過ごすことができた。また、事前に設定していた「日本でアイドル文化が発展した背景を探る」という旅行のテーマについても、見学や説明を聞く中で自分なりに少し色々なことを感じたり考えたりすることが出来たので、これからの研究に生かしていきたいと思う。終わってしまえばあっという間の旅行だった。それでは旅行を振り返ってみる。

初日は関西空港から高野山に向かい、奥の院を見学した後は宿坊にて宿泊した。

空港からの移動に使ったバスにはガイドさんがついていてくれ、通過する土地や高野山に関する様々なことを話してくれた。その知識の広さには大変驚かされ、私も勉強しなければと思わされた。その中でも特に印象に残っているのが玉ねぎの話である。玉ねぎを常温で４日間酢漬けにしたものを食べると増毛の効果があるという内容だった。家族も巻き込んで試してみたいと思っている。

途中で２日目にも利用することになった和歌山県の道の駅「かつらぎ西」に寄り休憩をとった。さすが特産である柑橘類が大量に安く売られていた。しらぬひをいただき（中川先生ありがとうございました)、次の日には自分ではっさくを買った。やはりその土地でとれたものをその場で味わえるのが旅行の醍醐味の一つである。その特別さも相まって大変美味しかった。

高野山奥の院ではガイドさんの説明を聞きながら見学した。

私には卒塔婆に関する説明が特に印象深かった。卒塔婆はもともと建築物で、日本の卒塔婆にも木でできた板状のもの以外に柱状のものや石で立体的に作られたものがあること、その形には意味があること、形に対応した梵字が刻まれていること（漢字で地、水、火、風、空とあるものもあった)、小さいものは室町時代に庶民の間で、大きいものは江戸時代に権力者の間で流行り作られたものであること、などを教えてもらった。

筑前黒田家のお墓。

卒塔婆の形は下から四角が地、丸が水、台形が火、半円が風、一番上の宝珠が空を表し、それぞれに下からア、バ、ラ、タ、キャと発音する梵字が刻まれている。これは全体で宇

宙を表している。縦長の石に４本の横線が入っているだけの簡易的なものもあった。また高野山を焼き討ちしようとした豊臣家や、現代の企業の慰霊碑、供養碑なども多くあり、ガイドさんも言っていた高野山の懐の深さをよく理解することが出来た。

卒塔婆の形や梵字で思想を簡素化して表現している点に、メンバーカラーやマスコットキャラクターなどアイドル文化においてなされている表現との関連性を感じた。

宿坊「普賢院」では夕食に精進料理をいただき、高野山系の湧水を使ったお風呂に浸かった。

お部屋にはこたつがあって感動！廊下がとにかく寒かった。

想像していたよりもはるかに豪華だった。みんなでいただいたのが楽しかった！本場のごま豆腐は美味しかった。

ご飯の後に班のみんなで少し周辺を散策した。

塔がライトアップされていた。

お風呂はお湯が自宅のものより柔らかい感じがしてとっても気持ち良かった。

２日目は朝のお勤めに参加し、宿坊内にある八体仏、仏舎利などを見学した。このような機会がなければ一生出来ないような貴重な体験をさせてもらった。ただ朝食の時間が 10 分ほどしか取れなかったが、大変美味しく、また自分がこれほど早く食事ができるとわかり、可能性は簡単に狭めてはいけないと思えたので良かった。

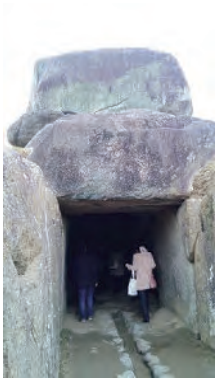
宿坊を出発し、壇上伽藍、金剛峯寺、霊宝館を見学した。４時間ほどで全て見るには情報を処理しきれないほどの数の仏像や曼荼羅を見ることが出来た。今回の旅行では後日の自主研修でも多くの仏像や曼荼羅を見たので、普賢菩薩は牙が３本ずつある象に乗っていることや曼荼羅には種類があることなど、おかげで仏像や曼荼羅の種類を以前より理解し、覚えることが出来たと思う。

下の方にある取っ手を持って１周回したらお経を読んだことになるもの。やってみたかったので嬉しかった。宗教はこのようなお経を読んだことにできるなど、だれでも修業が出来る装置が発達しているのが興味深い。

次に高野山を出て奈良県に向かった。高野山を出る際、またはいる際にもガイドさんが教えてくれたポイントで門が見られなかったことが残念だった。

昼食休憩を前日も訪れた道の駅でとった。せっかく和歌山県にいるので和歌山ラーメンをいただいた。醤油味だがどうやら豚骨スープが入っているようで、一味違っていて美味しかった。夕食に名物の柿の葉寿司を購入した。

奈良県では飛鳥の石舞台古墳と飛鳥資料館を見学した。



古墳を見るのは初めてだったので感激した。盗掘されていなければ蘇我馬子の墓だと確定できたかもしれないと思うと本当に残念。石室に入れて嬉しかった。

飛鳥資料館の庭にいくつか石像があった。左から石人像、高取の猿石、亀石。猿石は他にも並んでいた。映画「千と千尋の神隠し」に似たような石像が出てくるので関係が気になっている。飛鳥資料館には土器や石器、建築物の跡や壁画などについての資料があり考古学の視点からの展示が多かった。もっと時間をかけて見たい内容だった。

この後ついに京都に入った。ホテルに着いてから班のみんなと錦市場まで歩いた。錦市場につく頃には 19：00 を過ぎてほとんどの店が閉まっている時間になっており、疲れもあって心が折れかけたが、たこ焼き屋さんがまだ開いていたので救われた。しかも安くて美味しかった。

歩いていると錦天満宮に突き当たった。おみくじが獅子舞のロボットが引いてくれるようになっていたので、せっかくだからと思って引いたら大吉だった。

錦市場の終わりからも別のアーケードにつながっていて、そこはまだ多くの店が営業していたので進み続けた。すると急にあの「本能寺」が現れたのでとても驚いた。

日常に寺や神社がすっかり溶け込んでいる感じが北海道と違い不思議な感覚だった。

錦市場には次の日もリベンジに向かい見事果たすことが出来た。また最終日の大阪でも黒門市場を散策した。この旅行では市場や商店街の楽しさも満喫することが出来た。

３日目は終日自主研修だった。私は醍醐寺、三十三間堂、京都国立博物館、六波羅蜜寺を訪れた。

まず醍醐寺へは霊宝館で行われていた特別展「宗達とその時代」を見に行った。琳派という絵画の流派の始祖である俵屋宗達の作品の魅力を体感するためである。宗達は描写力はもちろんのこと、どこに何を描くべきかをとらえる配置力が特に優れていたとのことだった。実際に作品を見ると確かにそうであり、大変デザインに優れたものを生み出せる人だったのだと感じた。

三十三間堂に行く前に昼食をとった。バスガイドさんがオススメしていた鍋焼きうどんをいただいた。アツアツで具も贅沢で大変美味しかった。

三十三間堂では 1,000 体の観音立像をはじめとした多くの偶像を見学した。一体でも感動するような像があそこまで並んでいるのを実際に見るとものすごい迫力だった。

国立博物館では平成知新館の名品ギャラリーで行われていた特別陳列「獅子と狛犬」を目当てに見学した。私はこれまでどちらも狛犬だと思っていたが、向かって左におり、口を閉じて、頭に角が生えているのが狛犬で、向かって右におり、口を開いているのが獅子であると初めて知ることが出来た。他の陳列も花鳥画や着物など大変興味深いものばかりだった。

六波羅蜜寺へは空也上人立像を目当てに訪れた。中学生時代から実物を見てみたいと願っていた像をついに見られた。大きさはそれほどでもないのだが、その像の持つ雰囲気や今まで憧れてきた想いなどからか呼吸をするのも憚られるような気持になった。近くにはこれも教科書で見たことのある平清盛坐像があった。どちらにも会えて本当にありがたかった。

４日目は全員で京都御所を見学してから自主研修だった。

京都御所は外からしか見たことがなかったため、自然が豊かであること以外は知らなかった。実際に見学すると、思っていたよりも敷地が広く、建物も外観内装ともに凝っていて素敵で、さすが皇族が住まわれていたところだと感じた。

その後の自主研修では神戸に行った。街の作りや食べ物、景色など街の持つ様々な魅力を体感するのが目的だった。

まず南京町に行き昼食をとった。中華料理のセットをいただいた（中川先生ありがとうございました）。品数が多く味も良くとても満足感を得られた。

デザートにパンダまん（あんまん）もいただいた。あんがごまあんになっていて可愛くて美味しかった。

少し元町商店街を見た後に神戸市立博物館へ向かった。この博物館は旧居留地にあるのだが、私はその街並みを見るのも楽しみにしていた。レトロな石造りの建物が多く、高級ブランドショップが並んでいる様子は上品さや気品があふれていて、そこを歩いているだけでもおしゃれになった気分になることが出来た。

特別展「須磨の歴史と文化展」のみ見るつもりだったが、思ったより時間が取れ、興味深かったので常設展まで見た。須磨は平家物語や源氏物語にも登場する舞台であり、和歌にもよく詠まれてきた土地であるそうだ。また神戸市域の一角でもあることから、神戸開港をきっかけに近代には保養地や別荘地として発展したそうだ。ここで特に印象に残っているのは平敦盛の物語に関する資料だ。教科書で読んだことのある有名な場面を様々な絵で見ることが出来た。常設展では女性の髪の結び方を特集していた展示が興味深かった。昔からヘアアレンジは女性の注目を集めていたことがわかり楽しかった。

最後に元町商店街を満喫した。神戸でスイーツを食べるという夢を達成することが出来た。お土産などの買い物が楽しくてしょうがなかった。

５日目の自主研修では北野天満宮、龍安寺、岡崎神社、伏見稲荷大社を訪れた。

北野天満宮では咲き誇る梅が見られて感激した。当初の予定では立ち寄れそうになかったが、何とか行くことが出来て本当に良かった。

竜安寺ではずっと見たかった石庭をまったり味わうことが出来た。想像よりこぢんまりとしていると感じた。石は確かに一度に全て確認することはできなかった。

岡崎神社はうさぎがとても表立って祀られている神社であり、うさぎを買っていて大好きな身としてはぜひ一度は訪れたいと思っていた場所である。獅子と狛犬の他に狛うさぎ鵜や招きうさぎがいたり、おみくじまでうさぎの人形に入っていたり、うさぎだらけで本当に可愛らしい神社だった。私にとってはいるだけで幸せな気持ちになれる場所だった。

伏見稲荷神社へは千本稲荷を目当てに訪れた。実際にくぐってみるとかなり密集して、しかし互いに触れることのないように鳥居が建てられていた。たくさんの人の願いが集まる場所からは元気がもらえるような気がした。他にも神楽という儀式が見られて貴重な時間を過ごすことが出来た。狐の耳の形をした三角のお稲荷さんと餅が入った稲荷甘酒をいただいた。どちらも美味しかった。特に甘酒は苦手な人にもぜひ飲んでみてほしい。

最終日は大阪に移動し、国立民族学博物館を見学した後、道頓堀周辺を散策した。

民博も以前から見てみたいと思っていた場所だった。２時間ほど時間がとられたが、常設展だけでもサラッとしか見ることが出来なかったので必ずまた来ようと思った。民族学の視点からあれほど大量の資料を見るのは初めてだったがものすごく面白いと感じた。世界各国の祭りで使用されるものに派手で大きいものが多く興味深かった。

道頓堀では班のみんなで「食いだおれよう」というテーマのもと散策をした。

お好み焼き、たい焼き（金時芋あん）、たこ焼き、串カツ（玉ねぎ、うずら、れんこん）をいただいた。どれも美味しかったが、特にお好み焼きが印象に残っている。山芋のみの生地で仕上がっているものや牛すじ、こんにゃくなど自宅で作るものに入れないような具が入ったものがあり、関西なら

ではの味を感じることが出来た。明石焼きもいただきたかったが忘れていたのでいつかリベンジしたい。

私の研修旅行はこのように大変充実したものとなった。今回得た日本文化には古くから培われてきたアイドルのような存在を必要とする文化があり、「信仰対象と信者」と「アイドルとファン」との間に類似性が見られるという実感を活かすためにも、今後は文献収集に力を入れていきたい。本当に楽しかった。関わった全ての人に心からの感謝を申し上げる。

京の歴史を巡って

１部日本文化学科　２年　2714175　二本柳裕太

自分は文化のグローバル化を受けて自分の母国である日本の文化を見直すという目的で、５泊６日の関西圏への研修旅行に参加した。そして京都の歴史・文化をより深く知るというテーマと観光客の傾向に目を向けながら自主研修を行った。

自主研修の初日にはまず伏見稲荷大社へと足を運ぶことにした。伏見稲荷大社に到着してまず初めに驚いたのは、稲荷駅の出入り口から直接大社へと行くことが出来るというアクセスの良さだった。そして稲荷駅の入口は鳥居と同じ朱色と黒色に塗られていた事もあり大社の一部であるかのような印象を受けた。景観を意識した街づくりをしている京都らしい面白い工夫だと思った。本殿に入ると観光客も非常に多く外国からの団体客、特に中国人などのアジア系の方々が非常に多く観光に来ている様に思えた。しかし稲荷山の登山道を登っていく人は多くはなく、千本鳥居を通る人も山を登っていくにつれて全体的に少なくなっていたのを覚えている。鳥居が立っている箇所は階段が整備されており比較的登りやすい様にされていたのだが、鳥居を通らずに直接山を登る登山道も存在していた。そちらは京都在住の高齢の方らしき人が利用しており、自分もそちらを通ってみようと思ったのだが途中で大社から大きく離れてしまう事に気付き引き返した。千本鳥居を通り登っていく途中鳥居に奉納した企業や個人名が彫られていた事に気付き、その中に札幌在住の人物などの北海道出身者がいくつか見受けられたのが意外だった。一ノ峰に到着した時には一緒に登っていた人々が殆ど日本人の観光客らしく少し寂しく思った。しかし稲荷山の頂上に辿り着いた達成感は大きく素晴らしい体験であった。帰りにおみくじを引いてみたが結果は大吉だった。大大吉等の伏見稲荷大社だけの特別な運勢の存在を確かめたかったのだが大大吉の次に良い運勢だったので良かった。

伏見稲荷大社を見学した後に昼食にニシンそばと雀の焼き鳥を食べた。ニシンそばは蕎麦の上にニシンを煮た物をのせた温かい蕎麦で、ニシンの柔らかさとあっさりとした味わいが蕎麦に良く合っていた。雀の焼き鳥は内蔵を抜いた雀一羽を丸ごと焼き鳥にした物で、外見は人によっては引く様な物であるが、食べてみると骨も柔らかく肉も山椒の効いた濃い目の醤油だれと相性が良く美味しい物だった。ただ焼き鳥の方は今季の不猟の為一人一羽しか食べられなかったのが残念に思う。

平等院鳳凰堂の見学の為宇治へと向かった。平等院鳳凰堂は入場料とは別に鳳凰堂の内部の見学をする為に別料金が必要だった。その代わりに国宝である天蓋と巨大な丈六阿弥陀如来坐像を直に自分の目で眺める事が出来るという貴重な経験が出来た。鳳凰堂は阿字池の中央に浮かんでいるのだが、一万円札や十円玉にもその姿を用いられている。直にその姿を見ることによって採用された理由が自分なりによく理解出来た。鳳凰堂に本来飾ら

れていた雲中供養菩薩像の内、損傷や劣化が酷くなっていた物に関しては修繕作業の際に複製品と入れ替えられていた事をガイドの説明で知った。その入れ替えられた像の実物は平等院の敷地内にある鳳翔館で見ることが出来た。鳳翔館では平等院にまつわる品々や平等院の修繕作業に関する映像が展示されており、修繕作業の過程で現代の技術によって建設当時の姿を取り戻していくのがよく分かり面白く感じた。観光客の印象としては伏見稲荷大社と比べると個人で訪れる海外からの観光客はあまり多くなく、ツアーで来ている人々が多かったように思える。

平等院鳳凰堂の入口の前には宇治の名物である茶を原料とした菓子や茶そば等を売っている店が多く、平等院へ続く道では抹茶アイスを食べていた人も少なくなかった。またお土産として茶葉を購入して帰っていった観光客も見かけた。

研修二日目には三十三間堂と金閣寺に行った。三十三間堂は研修旅行に参加する以前、名前だけ聞いていた位の理解しか無かった。しかし御堂内に収められている千体にも渡る千体千手観音像とその中央に位置する千手観音像は荘厳な雰囲気が感じられまさに圧巻であり、仏像の森と公式ホームページで称されている姿に偽り無しであった。他にも手前には千手観音像以外の仏を模した像が並べられており、看板に書かれていた解説と共に詳しくその仏像について知る事が出来た。まだ午前中からだったのか見学に来ていた人はまばらであったが、外国の方も何人か訪れており意外に思った。千体千手観音像は一見すると全て同じ様に見えるのだが、実はよく観察すると微妙に手の位置が違っていた事に気付いた。視点を変えてみると面白い事実がある物だと思った。

次に訪れた金閣寺だが、最も金閣寺その物が良く見える場所には特に観光客の集まりが多く、高校生の団体らしき集まりも見えた。敷地内に展示されていた雪が積もった金閣寺の写真はとても綺麗な景色が映っており、自分が訪れた時期に雪が積もっていなかった事を残念に思う。また金閣寺や平等院を見学して気が付いたのだが、パンフレットや看板にあるマナー喚起の文章の中に敷地内でのドローン撮影禁止という一文が盛り込まれているのを見て時代が進むにつれて色々と難しい問題も生まれていくのだという事も実感した。

自主研修で回った建物はどれも日本の歴史に根付いた文化や風習そして宗教観に基づいており、いかに仏教が歴史的または文化的に強い影響を与えて来たのかを窺い知る事が出来た。この研修旅行の経験を頭に残してこれからに活かしていきたいと思う。

万城目学『鴨川ホルモー』の舞台を巡る

２部日本文化学科　２年　2814131　前田　曜

日本文化演習にあたり、京都を舞台とした万城目学の作品『鴨川ホルモー』に登場する場所を巡った。同作品は左京区を中心に物語が展開し、また伏見稲荷大社や立命館大学なども登場し、京都市を広く使った構成になっている。そのためこの作品をより深く理解するために、これを行った。

作品の主人公である安倍は貧乏学生という設定で、移動は基本自転車か徒歩である。それに倣い、１・２日目は自転車をレンタルし、３日目は徒歩で移動した。

１日目は、下鴨神社をスタート地点として、左京区をぐるりと回るように移動した。

作品内での下鴨神社は、安倍が葵祭のエキストラのバイトで歩いたルートのスタート地点として登場する。実際にそのルートを辿ろうとしたものの、高い木々や、やや隠れ気味なせいもあり、神社の西側出口を見つけるのに多少迷った。また、ここの糺の森はホルモーの戦場となった場所でもあり、広い馬車道で行われたものと考えられる。

ちなみに「ホルモー」というのは作品内で行われる一種の競技の名称で、小さなオニを従えて戦わせる模擬合戦のようなものである。その性質上、これを行うにはある程度の広さが必要となっている。現在は京都産業大学、京都大学、龍谷大学、立命館大学の４大学により競われている。詳しいルールはぜひ作品を読んで確認していただきたい。

下鴨神社を後にし、途中でホルモーの戦場の一つである京都府立植物園に寄りつつ葵祭のルートを辿り、上賀茂神社へ向かった。

上賀茂神社は、京都産業大学が代替りの儀を行う神社として登場する。山の入り口のような場所にあるものの、敷地が広く見渡せるようになっており、雄大さを感じさせる造りとなっている。京産大は昨年度の優勝校とされており、その設定の元となったのではと感じた。

次に京都産業大学へ寄り、そのまま東の安倍の友人が住む岩倉へと向かった。岩倉は主人公の通う京都大学の自転車通学圏内の極北とされており、そこに住んでいると口にしただけで笑う学生もいる、とも言われている。実際に行ってみると、確かに他の京都市内の場所と比べてのどかな印象だった。高い建物はなく、車や人通りもまばら。観光客もほぼいないので、非常に快適に自転車で走ることができた。

岩倉駅から南に行き、白川通を下って修道院駅を通り過ぎ、そのまま吉田神社へ向かった。

吉田神社は、京都大学が代替りの儀を行う神社として登場。吉田神社での代替りの儀は詳しく描写されており、そこで行われた踊りが実際どのような空間でなされたのか知ることができて、非常に有意義だった。おみくじも大吉だった。

その後は、主人公の通う京都大学を見学し、ホテルへ戻った。

２日目は、東山区と伏見を回った。初めに、三条京阪駅の土下座像を目指した。この土下座像は、主人公が待ち合わせとして使った場所で、勝手に渋谷のハチ公像のイメージでいた。さぞ多くの人がいるだろうと期待していくと、誰一人として土下座像の周りにいなかった。個人的には非常に衝撃的で、土下座像のイメージがガラリと変わった出来事だった。

そこから木屋町通を下り、四条河原町へ。そこから西へ行き、四条烏丸交差点まで歩いた。この辺りは４大学が集結し、会合を行う場所となっている。木屋町の居酒屋や、祇園祭宵山の「四条烏丸交差点の会」などがそれにあたる。

それから南へ行き、ホルモーの戦場となった三十三間堂へ立ち寄った後、龍谷大学へ向かった。

龍谷大学での印象は、「新しい」だった。ガラス張りの建物や、そこまで広くない敷地でありながら開放感のある設計となっていたことなどからそう感じた。この大学だけ、ホルモーサークルの名称が「朱雀組」から「フェニックス」へと変貌を遂げたのも、こうした面を加味したのではないかと考えられる。

龍谷大学の代替りの儀が行われた伏見稲荷大社に立ち寄った後、八坂神社へと向かった。

八坂神社は作中、各神社へと走る龍穴の中心地となっており、ここで告げ人を仲介として、代替りの儀が行われた各神社へオニが契約に則り現れるらしい、とされている。また看板にも大きく書かれていたが、八坂神社は縁結びの神社として有名である。このことから、「オニと人を結ぶ」神社として設定されたのではないかと思われる。

３日目は時間も少なかったため、北野天満宮と立命館大学のみの見学だった。

北野天満宮は立命館大学の代替りの儀が行われた場所として登場。学問にまつわる神社として有名だが、ここで吉田神社で行われた奇天烈な踊りと似たようなことをやったと考えると、いささか申し訳ない気持ちがした。また時期がよく梅が見頃だった。

立命館大学衣笠キャンパスは、主人公の安倍達の代である五百代目間ホルモーの初戦が行われた舞台でもある。だが、他の大学と比べてキャンパスはか

なり地味な印象を受けた。周囲に遊べるような場所は少なく、勉強に集中しやすい環境といえるだろう。

全体を通して、今までなんとなくで想像していたり、イメージできなくて読みとばしていたいた部分をかなり補強できた実感を得られた。特に、ホルモーの戦場となった場所や、左京区の主人公たちの生活圏を肌で感じられたことが非常に面白かった。また、自転車での観光がしやすかったのも印象的だった。多少坂や人ごみはあるが、各観光スポットにはほぼ駐輪場があり、車道も歩道もよく整備されていて走りやすかった。自転車を主な交通手段とする主人公に納得である。

『鴨川ホルモー』という作品の世界をより深く知ることができたことと、著者の万城目学先生に感謝である。

神様と使いの動物達

1部日本文化学科　2年　2714196　三好峻平

私は今回の演習で、神様の使いとして祀られている動物をテーマにいくつかの神社を回った。実際に行って感じた事なども含めつつ調べたことをまとめていく。

北野天満宮　*～日本最大の怨霊と神使の牛～*

北野天満宮は天神信仰の総本社である。学業に秀で、出世を重ねた菅原道真であったが、藤原氏の策略により左遷された大宰府で非業の死を遂げる。道真の死後、関係者の相次ぐ病死や清涼殿への落雷による火災など都で異変が続いたことから、これを道真による祟りだと考え、祭神として祀ったのが天神信仰の始まりである。

そんな天神様の神使となっているのは牛である。牛が使いになった理由は道真が丑年生まれであったからである。また、「牛の行くところにとどめよ」との遺言に従い、道真の遺体を乗せた牛車がとまった場所に埋葬したという伝承も理由の一つと言われている。北野天満宮の境内には至る所に臥牛(横たわった牛)の像があり、天神と牛の深い結びつきをうかがうことが出来る。撫でると一つだけ願いが叶うという「一願成就のお牛さん」を祀る牛舎には多くの人が参拝していて、すでに顔が分からないほどすり減っており、信仰の深さがうかがえた。

境内の至る所に道真公が愛した梅の木が植えられており、ちょうど見頃を迎えていたため敷地内はどこも梅の香りに満ちていた。立派な梅苑ともみじ苑もあり、道真公の怒りを鎮めようとしたところから信仰が始まり、社が建てられたことから、祭神が好きだったもので囲むという形になって表れているのではないかと感じた。

写真 1　手水舎の臥牛

写真 2　一願成就の撫で牛

伏見稲荷大社　*～神使の代表格、お稲荷さんの狐～*

「お稲荷さん＝狐」と誰でもイメージできるほど両者の関係は日本人に浸透している。しかし狐自体が神様であるわけでは無く、あくまで稲荷神の使いである。稲荷信仰と狐がいつ頃から結びついたのかはっきりとは分かっていないようだが、狐の習性が関係していると考えられている。

古くからの農耕信仰において、山の神は春に山から下りてきて田んぼを守護し、秋に収穫が終わると山に帰ると考えられていた。一方で狐は秋から冬にかけて里に下りてきて、穀物を食い荒らすネズミを捕って食べる。そのことから山神と深い関わりがあるとされ使いとして信仰されていた。この農耕信仰との関わりが食物を司る稲荷信仰の祭神であるウカノミタマ神と結びついたと考えられている。稲荷という社名も「稲生り」が由来となっており、稲作守護の神として信仰が始まった。

写真 3　参道入口の稲をくわえた狐

境内には狛犬の代わりに狐が置かれているなど様々な場所で狐が見られた。狐の人形のお守りが売られているなど、今では切っても切れないほど強く結びついていることが分かった。稲荷神は五穀豊穣の他にも商売繁盛や病気治癒のご利益もあるとされ多くの信仰を集めている。たくさんの鳥居が連なる千本鳥居が有名であるが、現在でも新しい鳥居が増えている。

伏見稲荷大社がある稲荷山自体が信仰対象として考えられており、山中にあるいくつかの社を登山しながら参拝することが古くから行われていた。平安時代の清少納言による随筆『枕草子』にも伏見稲荷大社に関する記述がある。

> 稲荷に思ひおこしてまうでたるに、中のみやしろのほど、わりなうくるしきを、念じのぼるに、いささか苦しげもなく、おくれて来るとみる者どもの、ただ行きに先立ちてまうづる、いとめでたし。
>
> （枕草子　第一五八段　うらやましげなるもの）

ふと思い立って稲荷参拝をしたところ、思いのほか道が険しく息が苦しいのをこらえて登っていると、後から来る人たちが楽々と先に行ってしまうのはうらやましい事だ、という内容である。このことから都では、当時からそれほど身近なところに稲荷信仰があったことが分かる。私は実際に頂上まで登ってきたが、大体一時間と少しで登り切ることが出来たが、かなり険しい道のりであった。これを平安時代当時の女性が上るというのは、相当大変なことであっただろうと想像すると、道中つらい部分を乗り越える力になった

この「おせき社」は稲荷山をしばらく登った場所にあり、せきを治す加護があるという。そのためここの狐は、前掛けを首元まで上げている。

写真 4　中腹のおせき社の狛狐

まとめ

動物達は様々な由来がありそれぞれの神社の祭神と結びついてきていた。たくさんの社でそれぞれ関わりのある動物を祀るのはなぜなのだろうと考えていたが、実際参拝してきて、シンボルとして動物がいると、その神社が信仰している神様の事がとても分かりやすく伝わってきた。あまり難しい事を考えなくても、信仰が始まった当時の人々にはその役割から神様の力などを想像することが出来るだろうし、現在では信仰心が無くとも、動物がかわいいというきっかけで人が集まることもあるだろう。信仰を広めるための道具としても、動物たちはその力を発揮してきてくれたのだなということが、今回の演習を通して実感できた。今後もよりたくさんの寺社仏閣を巡り、日本の信仰について考えていきたい。

京の冬の旅と新選組発祥の地

２部日本文化学科　2年　2814137　村田真悟

私は2月24日から3日間、京都で自主研修を行った。

私は1日目の自主研修のテーマを「京都の世界遺産を巡る」としていた。京都には17か所もの世界遺産がある。その中でも金閣寺周辺の世界遺産を巡ろうと考えていた。しかし前日に、京都では今の季節に「京の冬の旅」というフェアを開催していることを知った。「京の冬の旅」というのは、普段は非公開の重要文化財を特別に一般公開しようというフェアで、50回目を迎える今回は「禅～ZEN～禅寺の美、日本の美」をテーマに、日本の文化・芸術に大きな影響を与えた禅宗寺院を中心に、庭園や仏像、襖絵など様々な文化財が公開された。

私がまず最初に向かったのは、大徳寺だ。大徳寺とは1315年に大燈国師(宗峰妙超)が開いた臨済宗大徳寺派の大本山だ。応仁の乱で焼失してしまったが、その後一休さんで有名な一休禅師によって復興された。大徳寺では芳春院と本坊の2つが公開された。私はまず、芳春院に向かった。

芳春院は臨済宗大徳寺派の塔頭寺院で1608年に加賀藩主・前田利家の正室まつが、玉室宗珀を開祖として創建した前田家の菩提寺だ。本堂には本尊・釈迦如来像や初代住職の玉室宗珀の木像が安置されている。また、その両脇にはまつと利家が祀られている。その本堂から眺められる南庭は「花岸庭」と呼ばれる枯山水庭園で白砂が一面に広がり、山深い渓谷から流れ出る水がやがて湖に注ぎ、大海に帰るという山水の様を表している。本堂の北側には呑湖閣と呼ばれる優雅な二重楼閣がある。呑湖閣は、金閣、銀閣、飛雲閣に並ぶ京の四閣とも称されている。上層部には、前田家の先祖とされている菅原道真を祀っており、下層部には檀家にまつわる人々を祀っている。次に本坊へと足を運んだ。本坊の方丈は8室に分けられていて、84面ある襖絵すべては、江戸初期を代表する絵師、狩野探幽が手掛けている。また方丈庭園は江戸初期の枯山水庭園で、天祐和尚が手掛けた南庭は、一面の白砂の奥、深山を表す椿の刈り込みを背に滝を表す2つの大石を立てた平庭である。また小堀

遠州の作庭による東庭は七・五・三に石を配置している。私は大徳寺と聞いたら一休さんのイメージしかなかったが、前田家や近衛家に縁があることを初めて知った。また京の四閣のうち、金閣、銀閣、飛雲閣には実際に足を運んだことがあったが、呑湖閣には今回はじめて訪れたが、他の3つとは違い、とても静かで手前の月見台、池とマッチしていて趣深さを感じた。当時は勉強部屋として使われていて、私もこんな静かな場所で勉強したら捗るのではないかと感じた。

大徳寺の後は、妙心寺へと向かった。臨済宗妙心寺派の総本山で、花園法皇が離宮を改めて禅寺にした。開山慧玄が開祖。妙心寺は、玉鳳院、天球院、霊雲院の3つが公開されていた。その中で私は玉鳳院が一番心に残っている。その理由は玉鳳院の枯山水庭園だ。蓬莱式の枯山水庭園は渡り廊下を挟んで大きく南北に分かれていて、北側には枯滝や石組、南側には一面に白砂に松や敷石が配されたにはが広がっている。私は、枯山水はふつう白砂が一面に広がっているものだと思っていたが、この玉鳳院の枯山水庭園の北側の方は、白砂が一切なく、石組で大海を表現されていた。それがまたシンプルさの中に工夫が成されていてとても趣深く感じた。私の中の枯山水にイメージが一新された。

私がこの2つの禅宗寺院を訪れて感じたことは、禅宗寺院と枯山水庭園はとても関わり深いものだということだ。枯山水は基本的に寺院の南側に作られる。手前の白砂は大海を表している。中には、寺院の廊下が現世、白砂が境目になり、奥の石があの世を表している場合がある。枯山水と禅は切っても切り離せない関係があるのだ。

2日目は新選組に縁の地を巡ることをテーマに自主研修を行った。私はまず、新選組始まりの地と言われる八木邸を訪れた。この八木家の屋敷は新選組が最初の屯所として使われた。この屯所には芹沢鴨や新見錦といった浪士組が駐屯していたが、その芹沢鴨らの横暴を見かねた同じ新選組の沖田総司や土方歳三らにより、芹沢鴨らの暗殺が行われた場所でもある。実際に中を見てみると、刀傷や血の跡が見て取れた。八木家は現在、お茶屋を営んでいて、八木邸の説明とお茶とお菓子がセットになっているのが新選組好きにはたまらないだろう。

次に八木邸の隣にある壬生寺へと足を運んだ。壬生寺の境内はかつて、新選組隊士の兵法調練場に使われ、武芸や大砲の訓練が行われていた。壬生寺の横にある壬生塚には八木邸で暗殺された芹沢鴨やその妻のお梅、平山五郎らをはじめとする多くの新選組隊士が祀

られている他、新選組局長、近藤勇の像がある。壬生寺の本尊は延命菩薩というものだが、若くして亡くなった新選組隊士が祀られているというのはなんとも皮肉なものだと感じた。

3日目は、世界遺産である天竜寺や国宝の千手観音が祀られている三十三間堂などの高校の日本史の教科書の載っている場所を実際に訪れ、写真とは違う壮大さを感じた。私は教師を目指しているので、生徒たちに実際に見て受けとった感じを伝えることができればと思った。

今回のこの3日間の自主研修で学んだことを、今後に活かしていければいいなと感じた。

日本文化演習を終えて

2部日本文化学科　2年　2814142　山﨑朔夜

京都を中心とした関西地方で6日間にわたり行われた日本文化演習。「文学の世界に触れる」ということをテーマとして北海道とは違った文化や環境に注目した。自らの目や肌で感じることで知識を深めることが出来た。京都の他、和歌山や奈良、大阪とあらゆる場所を回ったため、同じ関西方面の中での環境の違いに気づくこともでき日本文化を学んでいく上でとても力になる経験が出来た。

3日目以降のグループ行動では最初に訪れた清明神社で「清明桔梗印」いわゆる「五芒星」の刺繍の入った御朱印帳に惹かれ御朱印集めも同時に行うこととした。御朱印とはもともと写経を納めた証に「宝印」を授けられたもので、ほとんどの神社仏閣においては社寺名を中央に朱印し、社寺名と参拝日をその場で墨書きしていただけるというものだ。縁結び・神学の神様で人気があり嵯峨野の竹林の中にある野宮神社は朱印のみであったし、南禅寺や伏見稲荷神社はもともと書かれてある（または印刷してある）紙をいただいたり、世界遺産にも選ばれ、境内にある糺の森が枕草子や源氏物語、多くの和歌に登場することで有名な下鴨神社（賀茂御祖神社）は御神紋である双葉葵が緑色で押されていたりとさまざまであった。あとで見返したときにその寺社の光景を思い出したり、なにより字を書いていただいているときに御朱印の良さを感じた。

行くまでは寺社の参拝にあまり興味はなかったが初日から2日目にかけて和歌山県にある高野山で学んだことが良い影響であった。奥の院や金剛峯寺、大伽藍、高野山霊宝館そして泊らせていただいた普賢院にて今まで触れることのなかった宗教的事柄を貴重な体験を通して知ることでさまざまな寺社をしっかりと意味を持ち参拝することが出来た。

自主研修1日目には『徒然草』第52段「仁和寺にある法師」でよく知られている仁和寺を訪れた。仁和寺は光孝天皇が西山御願寺として着工。宇多天皇が888年に完成され、現在では真言宗御室派の総本山であり、世界遺産にも登録されており由緒あるお寺である。境内は想像していたよりもとても広く、宸殿、白書院、黒書院と美しい襖絵に目が奪われた。宸殿を挟むように位置する南庭と北庭は違った美しさを持っており、仁和寺全体を通して時間がゆっくりと進んでいるようであった。このような素晴らしい由緒あるお寺にいた法師が酔っ払い足鼎を頭にかぶって取れなくなったり、石清水八幡宮に参拝したが本殿は見ずに帰ってきてしまっただとかと書かれていたのかと作品を学んでいたときには感じることのなかった驚きを感じた。次に野宮神社を訪れた。神社の周辺は嵯峨野の竹林を代表するもので昔から「野宮竹」で知られているそうだ。庭園

は豊かな苔でできておりその美しい風景は『源氏物語』の賢木の巻や芭蕉や蕪村の俳句などさまざまな作品で描写されている。神社の鳥居は黒木鳥居といい樹皮がついたままのあまり見ることのない鳥居であったことも印象的である。なにより北海道に住んでいればまず見ることのない竹林。真っ直ぐ高く伸びる緑のたくさんの竹の間から射す太陽の光がとてもきれいで多くの俳句や和歌、水墨画などで竹が表現されていた意味、表現していた風景を身をもって知ることが出来た。観光客がとても多くにぎわっているため竹の音や落ち着いてゆっくり見ることが出来なかったという惜しいところもあったが一番古典文学の世界に触れることのできた場所であると感じる。

２日目は『枕草子』の第 158 段に書かれている伏見稲荷大社を訪れた。千本鳥居はテレビや雑誌で見るよりもずっと美しい朱色でどの鳥居の下を歩いても飽きることはなかった。だが枕草子にもあるように坂を上っていくのがなかなかに息苦しい。階段を駆け上がっていく子どもたちを羨ましく思いまさにこのことを書いていたのだなととても身近に感じることが出来た。次に六道珍皇寺。ここは六道の辻にありあの世とこの世の境といわれている。「冥土通いの井戸」と「黄泉がえりの井戸」があり他のお寺とは全く違う独特の雰囲気をまとっていた。中では六道にまつわるお話を聞くことが出来、地獄絵や閻魔堂、お迎え鐘の鐘楼を見ることができる。決して広い場所ではないが異世界にいるような気分になる。ミステリースポットとしても有名な六道珍皇寺はぜひ一度自らでその独特の雰囲気を体感していただきたい場所である。そして南禅寺の境内を通過している琵琶湖疎水の支線の一部となるレンガ造りの水路橋である水路閣。京都の名所の一つであるこの水路閣はレンガ造りの為す綺麗なアーチで、そこに年季がはいることで美しさがより一層深くなっていた。日本らしい風景から一変。まるで違う国に来たような気分になる水路閣はさまざまな角度から見ても飽きることはなく、カメラに収めるとまた違った良さが生まれる素晴らしい建造物であった。

上記の他にもいくつかの寺社や商店街を歩いた。今回の演習は自らの足で歩き、目で見て肌で感じるということの重要さや京都はもちろん日本文化の貴重さ素晴らしさを再認識できる良い機会となった。そして自分の興味のあるものばかりではなく興味のなかった分野も知ることで新しい視点が生まれ興味のあることの知識も一層深まるということを実感した。

枯山水の庭を巡る

２部日本文化学科　２年　2814143　山田康太

今回、関西地方、特に京都を訪れるのは高校２年の修学旅行以来であった。その時と比べ、自主研修の時間も長かったせいなのか、様々な場所を訪れることができて、尚且つ一つ一つの場所に時間をかけてすみずみまで見ることができた。さらに、旅行の間、「京の冬の旅」と題して、普段公開されていない文化財を特別に見ることができて、とてもいい機会となった。

そこでこのような特別公開された場所にもあった、枯山水の庭についてこの旅行では注目してみることにした。そもそも枯山水とは水のない庭のことで、池や遣水などの水を用いずに石や砂などにより山水の風景を表現する庭園様式である。たとえば白砂や小石を敷いて水面に見立てることが多く、橋が架かっていればその下は水である。また、石の表面の模様で水の流れを表現することもある。抽象な表現の庭が室町時代の禅宗寺院で特に用いられ発達した。従来の庭園でも技法として庭園に用いられ、寝殿造り庭園でも枯山水の部分を含み、大名屋敷に造られていく回遊式庭園も枯山水を含んでいることがあったが、禅宗寺院で用いられて以降、独立した庭園として造られるようになった。日本庭園は水を得られる場所に築くものであったが、枯山水様式の登場後は必ずしも水を使わなくとも造園が可能になった。

それでは具体的に今回訪れた枯山水のある寺院についてだが、まずはじめに竜安寺である。おそらく枯山水の庭で一番有名でさらに世界文化遺産登録もされているので国際的にもよく知られている庭である。自分が訪れた際にも海外の人が多く見受けられた。その石庭についてだが、幅２５メートル、奥行１０メートル程の空間に白砂を敷き詰め、東から５個、２個、３個、２個、３個の合わせて１５の大小の石を配置する。これらの石は３種類に大別できて、各所にある比較的大きな４石はチャートと呼ばれる竜安寺裏山から西山一帯に多い石である。また、この石庭はどの位置から眺めても必ずどこかの一つの石が見えないように配置されていることでも有名である。

竜安寺

竜安寺自体は訪れるのは２回目で前回は秋だったが、その時とは空気が違い、石庭が見渡せる場所に座ってみたのだが、明らかに感じたことがないほど心が落ち着き、安らげる場所であった。なぜ落ちつくことができたのか理由は全くわからないが、その石庭に力が

あるのは間違いないと思った。

大徳寺　芳春院

次に大徳寺を訪れたのだが、寺自体は臨済宗大徳寺派の大本山であり、鎌倉時代末期の 1315 年に大燈国師宗峰妙超が開創した。室町時代には応仁の乱で荒廃したが、一休和尚が復興。桃山時代には豊臣秀吉が織田信長の葬儀を営み、信長の菩提を弔うために総見院を建立、併せて寺領を寄進、それを契機に戦国武将の塔頭建立が相次ぎ、隆盛を極めた。勅使門から三門、仏殿、法堂、方丈と南北に並び、その他七堂伽藍が完備する。千利休によって増築された三門二階部分を金毛閣と称し、利休の像を安置したことから秀吉の怒りをかい利休自決の原因となった。本坊の方丈庭園は江戸時代初期を代表する枯山水。方丈の正面に聚楽第の遺構とされる唐門がある。その中で特別公開されていた本坊と芳春院を訪れて、芳春院の枯山水の庭が特に印象に残った。芳春院は 1608 年加賀藩主、前田利家の正室まつが、玉室宗珀を開祖として創建した前田家の菩提寺で今年、400 年遠忌を迎える、まつの法号から「芳春院」の寺名が付けられた。まさに記念すべき時におとずれることができて幸運だった。さて、本題の庭についてだが、「花岸庭」というまつの戒名からとったという名前で白砂が広がる枯山水庭園で元々は桔梗でいっぱいの庭であったそうだ。昭和の終わりに枯山水の庭となり、山深い渓谷から流れ出る水がやがて湖にそそぎ、大海に帰るという山水の様子を表している。

妙心寺　玉鳳院～

最後に妙心寺を訪れたのだが、全国に 3400 の寺院を持つ臨済宗妙心寺派の大本山で 1337 年花園法皇が関山慧玄を招いて開山した。この地にあった法皇の離宮を禅宗に改めた。応仁の乱で多くの堂塔を焼失したが、細川勝元、政元親子らの援助で最興し、その後、豊臣、徳川家をはじめ諸大名が帰依し、隆盛を極めた。南から三門、仏殿、法堂と重要文化財の伽藍が一直線に、その周囲に 46 の塔頭が並ぶ。

今回は玉鳳院、霊雲院、天球院を訪れて、その中でも玉鳳院の枯山水を紹介しようと思う。蓬莱式の庭で渡り廊下をはさんで大きく南北にわかれ、北側には枯滝や石組、南側に

は一面の白砂に松や敷石が配された庭が広がっている。岩は少なく、白沙というシンプルな作りではあるが、ひとつ面白いと思ったのは白砂には模様が描かれていて、それが一定期間ごとに変わっているのだという。それは見るものを楽しませるという意味もあるが、その模様によって、寺院側の思いや考えをも表しているようにも思われた。

　このように枯山水について述べてきたがほかにも様々なテーマで書きたいことはあった。しかし、どのテーマで書いたとしても言えることは、自分の住んでいる地域と違う地域の文化や特色を学ぶことは自分の見解を深めるうえで良い糧となり、また、「百聞は一見に如かず」という諺があるように実際にその場所に行って五感を使うことが何よりも大切だと思った。

研修旅行レポート

法学部　2部　2年　西理沙

1　高野山での宿坊宿泊

研修旅行の初日は高野山の普賢院（ふげんいん）に宿泊しました。高野山は和歌山県にある、千メートル前後の山に囲まれた真言宗の霊地で、今回宿泊した普賢院は高野山のほぼ真ん中に位置し、標高は約 800 メートルの所にあります。普賢院の始まりは大治年間（十二世紀）覚王親王が高野山に登山したときに、念持仏の普賢菩薩を力乗上人に与えられたことから、院が開かれたとされています。

私は宿坊に宿泊するのは初めてだったのですが、居心地がよく、夜もぐっすり眠ることができました。部屋にはこたつやテレビ、お菓子にお茶まで用意されており、私の想像していた宿坊とは違いました。この先も高野山のお寺に宿泊することはそうそうないと思うので、研修旅行に参加して良かったです。

Ⅰ 高野山の歴史

弘人 7（816）年、空海が高野山に真言密教の道場金剛峯寺を創建、そのとき高野山と山号をつけられたところから歴史が始まりました。山号とは寺院の名に冠する称号で、もと寺院は多く山にあり、その山の名をもって呼ばれました。明治 5（1872）年の解禁まで山上は女性が入ることが許されず、これは当時の女卑文化が原因でした。七口と呼ばれる参詣路のそれぞれに女人堂がありましたが、現在は不動坂口だけに残っています。

2004 年には紀伊山地の霊場と参詣道として、熊野三山などとともに世界遺産の文化遺産に登録されました。

Ⅱ 金剛峯寺

金剛峯寺（こんごうぶじ）は、和歌山県高野町にある高野山真言宗の総本山で、弘人 7（816）年に空海が真言密教の道場として金剛峯寺を創建しました。金剛峯寺の名称は弘法大師が命名したもので高野山一山の総称でしたが、明治以降は山内寺院としての本坊をさしています。

現在の金剛峯寺は一つの独立した形をなし座主の住寺ですが、高野山全体を総轄する伝統はそのままここに残され、また、高野山真言宗総本山として一切の宗務を司る宗務所があって全国及び海外の末寺四千か所の寺の行政を統べ、千万大使信徒の信仰の中心となっています。

Ⅲ 精進料理

野菜、海草など植物性食品を材料とした料理を「精進料理」といいます。精進とは、仏教用語で、美食を戒めて粗食をし精神修養をするという意味でしたが、仏教では「不死生戒」を第一とし肉類を用いないことを原則としているところから、肉類を使わない料理を精進料理というようになりました。料理法は、主として禅宗の僧が平安・鎌倉時代に中国から習得してきたものがもとになっています。

下の写真は夕食の精進料理です。見た目よりもお腹いっぱいになりました。

▸胡麻豆腐がとても美味しかった。高野山の胡麻豆腐は有名だそう。珍しかったのは干し柿の天ぷら。サツマイモに似た食感でほんのり甘かった。

Ⅳ 朝のお勤め体験

お勤め体験は朝の 7 時から普賢院本堂で行われました。本堂にはストーブが一台あるだけで部屋の中はとても冷えていましたが、不思議とそれほど寒く感じませんでした。薄暗い室内に蝋燭の火がぼうっと点り、障子から透かして見える外界の日が対照的でした。しばらくするとお坊さんたちがお経を唱え始めました。私はきちんとお経を聞くのは初めてだったのですが、千数百年も前から人間はこうして同じように言葉を唱えていたと思うと宗教の力はすごいな、と思いました。人類はどんなに文明が発展したとしても、根本的なものは変わらないのかもしれません。この先もずっとこの仏教文化というものは続いていくと思います。

15 分ほどお経を聞いた後は、本堂の中や摩尼殿を見学し、八体仏や曼荼羅などの説明を受けました。また仏舎利も見せていただきました。仏舎利はお釈迦様のお骨のことです。高野山のお寺の中でも一般客に公開している所は少ないそうで大変貴重な体験をすることができました。

2　京都での自主研修

京都ではここで紹介する他にも様々な場所を訪れ、京文化を肌で感じてきました。地下鉄やバスで聞こえてくる京都弁は柔らかな印象で心地よく、改めて方言の面白さに気づくことができました。

Ⅰ 京都の歴史

延歴 13（794）年桓武天皇が平安京を建設、以後明治維新まで約 1000 年の間、京都に都が置かれ、当時は政治・文化の中心地として栄えました。その後市街地は平安京が東方と北方へ延びたかたちとなっています。明治時代からは重要な歴史都市として発展、現在では世界的な観光都市となり海外からも毎年たくさんの観光客が訪れています。

Ⅱ 錦市場

錦小路の魚市場の歴史は古く、延歴年間（782～805）に開かれたといわれていますが、確実な資料は残っていません。その後、江戸時代に入り 1615 年に幕府により魚問屋の称号が許されたことで魚市場としてさらに栄え、昭和 2 年には京都中央卸売市場が出来たのを境として、現在のような姿に変わっていきました。

錦市場では京都の旬食材や京野菜、京漬物、湯葉、佃煮、豆腐、菓子に至るまで手に入り、試食できる店舗もたくさんあります。観光客と地元の人々で活気づいており、通りを歩くだけで楽しく、ついつい財布の紐もゆるんでしまいます。

しかし、意外とお店の閉店時間が早く、18 時にはすでに閉まっているお店もあります。そんな中でかなり遅くまで営業していたのが、たこ焼き屋の『カリカリ博士』でした。なんとジャンボたこ焼きなら 6 個入りで 180 円、チーズ入りやネギ入りでも 250 円という激安価格でした。私はネギ入りのたこ焼きを食べましたが、ソースが香ばしく、表面はカリカリで中身はふわとろ。その日は歩き疲れていたこともあって、本当にたこ焼きの美味しさが体に沁みました。ほの暗い中に優しく光るオレンジ色の看板にさえも癒されました。たこ焼きは大阪でしょ、と思わずにぜひ京都でも食べてみてください。

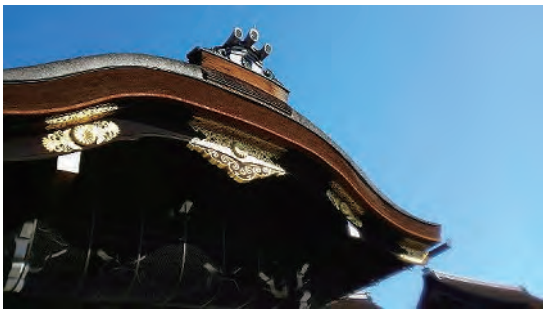
▶目印のオレンジ色の看板。錦市場のたこ焼き屋はこの一店しかない

練り物の店もよく見かけた。目移りしてしまうほど種類が豊富▶

Ⅲ 二条城

地下鉄二条城駅から徒歩数分というアクセスの良さからなのか、入場開始時間にも関わらず、すでに多くの観光客で賑わっていました。二条城は 1603 年（慶長 8 年）徳川幕府初代将軍徳川家康が京都御所の守護と将軍上洛の際の宿泊所として造営し、三代将軍家光が後水尾天皇の行幸にあわせて 1626 年（寛永 3 年）に改修されたもので、絵画・彫刻・建築に桃山から江戸への時代の移り変わりを見ることができます。また、庭園にはウメやサクラの他、イチョウなども植えられており季節ごとに表情を変え、訪れる人を楽しませています。

お城自体も見所がたくさんありましたが、特に天守閣跡から見下ろすウメの木々は絶景でした。その日は天気が良く、晴天の蒼色とウメの紅色が鮮やかで、春の足音が聞こえてくるようでした。昔の日本人もこの景色を見ながら冬から春の移り変わりを感じていたと思うと、感慨深いものがありました。あまりにも感動したので、いつか違う季節に見に行きたいと思います。



▶装飾の金の部分が陽に照らされて一層輝いて見えた

Ⅳ 京都国立博物館

国宝・重要文化財を多数含む館蔵・寄託の文化財約 12500 件を収蔵しています。2014 年にオープンした平成知新館では名品の数々を観覧することができます。

特別展として「獅子と狛犬」が開催していたのでそちらも観覧してきましたが、とにかく展示品の数が多かったので十分な時間を取ることができませんでした。その中でも、特にカラスの屏風絵は圧巻でした。

3 神戸での自主研修

三日間の自主研修期間のうち 1 日だけ神戸に行きました。京都駅から神戸三宮駅まで JR で移動、新快速であれば 1 時間未満で行くことができます。

Ⅰ 神戸の歴史

神戸では市内各所から旧石器時代の石器が出土していますが、いつごろから人々が住み始めたのか、またその当時の生活の様子などはよく分かっていません。この時代の代表的な遺産である「銅鐸・銅戈（どうたく・どうか)」は神戸市立博物館に展示されており国宝に指定されています。

近世時代、古代から港町として発展してきた神戸は、天下の台所・大阪を控えて海上交通の要所であると共に、西国街道沿いの宿駅でもありました。その後、長い間鎖国政策をとっていた日本ですが、1858 年の日米修好通商条約により神戸が開港されると、衣食住から娯楽や文化などあらゆる面で欧米の生活様式が持ち込まれました。こうして神戸はいち早く文明開化の洗礼を受けて国際貿易都市として発展しました。

現在でも神戸は日本有数の貿易港であり、阪神工業地帯の中核を担っています。また、最近では神戸の夜景が日本新三大夜景に選ばれ、特に六甲山、麻耶山から見るスポットは人気があり、たくさんの観光客が訪れています。

Ⅱ 南京町

横浜中華街、長崎新地中華街とともに日本三大チャイナタウンの一つに数えられるのが神戸の「南京町」です。中華食材や飲食、雑貨など多彩な店舗が軒を連ね、中国風の赤い建物が目立ちます。自動販売機の上にパンダのモチーフがあるなど随所から中国らしさを存分に感じることができます。1 月または 2 月に春節祭、9 月または 10 月に中秋節など一年を通して多彩なイベントが開催され、多くの観光客で賑わいをみせます。

南京町では昼食として餡かけ麺に唐揚げや焼売、サラダなどが付いているセットを食べました。唐揚げの衣が固くてサクサクカリカリで美味しかったのですが、店員さんの対応があまり良いものとはいえず、日本との文化の違いを実感しました。しかしこれもまた、南京町の魅力の一つで、日本にいながら外国にいる気分を味わうことができました。まだまだ食べたいものが沢山あったので、是非また行きたいと思います。

▸自動販売機の上にパンダを発見

▶謎の餡かけ麺。味は美味しかったが、結局これが何なのかは最後まで分からなかった

Ⅲ 神戸市立博物館

神戸市立博物館は、外国人居留地だった地域にあり、明治以降に発展した神戸の中心地で、三宮駅から徒歩 10 分ほどのところにあります。以前からあった市立南蛮美術館と考古館を統合し、新しい人文系の博物館として 1982 年（昭和 57）秋に開館しました。この博物館は、昭和 10 年に建築された旧横浜正金銀行神戸支店（現、三菱東京ＵＦＪ銀行）を増改築して使用しており、建物自体が昭和初期の名建築といわれています。正面には 6 本のドリス式半円柱が並び、御影石の外装を施した古典主義様式の建物で、平成 10 年に国の登録文化財になりました。訪れる際には展示物だけではなく、建物自体にも注目してほしいです。

自主研修の日は、特別展「須磨の歴史と文化展」が開催中で常設展示と合わせてそちらも観覧してきました。どちらも見ごたえがあり、ゆっくり見るには 2 時間では全く足りませんでした。

神戸市立博物館は「国際文化交流～東西文化の接触と変容」を基本テーマとして展示しています。神戸は古くから重要な貿易港として近隣の港と交流していたため様々な外国文化を受け入れながら発展してきました。そのため、この博物館では南蛮文化の展示物を数多く見ることができます。「南蛮屏風」や杉田玄白の「解体新書」など教科書で見覚えのある資料も展示してあり、楽しみながら観覧することができました。神戸文化について理解するにはもってこいの場所です。

Ⅳ 旧居留地

1858 年（安政 5）に幕府が諸外国と結んだ日米修好通商条約により、日本は長年に及んだ江戸幕府の鎖国政策に終止符を打ち、横浜・長崎・函館・新潟・兵庫（神戸）の５港を開港することになりました。

神戸旧居留地の歴史はこの時に始まったといえます。居留地の造成はイギリス人が設計を行い、格子状の街路、街路樹、公園、街灯、下水道などが整備されました。

その後居留地は発展しますが、第二次世界大戦勃発時に神戸在留外国人の活動は大きく後退し、その多くは祖国へ追われていきました。

現在では海外の高級ブランド店舗や日本企業が立ち並び、神戸の新しいファッションの発信地として人気のエリアとなっています。

４　大阪で食い倒れ

研修旅行の最終日が大阪での昼食だったので、道頓堀周辺を歩きながら食い倒れてきました。ここで少しだけ道頓堀について紹介します。

道頓堀は 1612 年に安井道頓（やすい・どうとん）が私財をなげうち、南堀河の開削に着手しました。大阪夏の陣で道頓は戦死しましたが、大阪城主松平忠明の命で弟子の道卜（どうぼく）が工事を引き継ぎ、1615 年に運河が完成、開削者・道頓の功績を後世に伝えるため、「道頓堀」と名付けました。

現在では国内外問わず多くの観光客が訪れる人気スポットで、有名なグリコの看板の前ではポーズをとって写真撮影する人がたくさん見られました。また歌舞伎の松竹座や、なんばグランド花月など演劇・演芸の中心地としても賑わいを見せています。

Ⅰ　お好み焼き

まずは一番のお目当てのお好み焼きを食べるためお店を探しながらブラブラ。外国の観光客が多く、聞こえてくるのは大阪弁よりも外国語でした。アジア系の方が多かったと思います。お好み焼き屋はたくさんありますが、どのお店も賑わっていて、良さそうな店は店内から溢れるほどの行列になっていました。その日が土曜日だったということもあると思いますが、道頓堀がいかに人気スポットか実感。道を歩くだけでもソースのいい香りがしてきて食欲をそそられます。

迷ったあげく『どむす』に入りました。ここは創業 54 年の老舗店で、テレビでもよく取り上げられているとか。頼んだのは、ロール焼きそば、豚玉、山芋焼、ネギ焼きスジ入りの 4 つ。ロール焼きそばは卵焼きでソース焼きそばを包んでいるもので、いわゆるオムそばです。ちなみに人気ナンバー1 のメニューはネギ焼スジ入りでした。

▸席の隣がお店の鉄板だったので、店主の華麗なヘラさばきを見ることができた

少し待っているとロール焼きそばが運ばれてきました。麺は太めでもちもち、なんといってもソースが本当に美味しい。お好み焼きへの期待度も高まります。続いて、お好み焼きを実食。ソースが香ばしく、生地もアツアツ。特に山芋焼は生地がもちもち、具だくさんでとても美味しかったです。具はエビ、貝柱、玉子など。お好み焼きは名前につられてメニューを選ぶと具材を見落としがちなので、苦手な食べ物（特に魚介類）がある人は注意したほうが良いと思います。

▸人数分に分割するのが意外と難しかった。お好み焼きはやっぱり偶数が向いている

Ⅱ たこ焼き

『大阪で 1 番おいしい　たこやきくん』という看板、さらに「たこ焼き 7 個 280 円」という文字。道頓堀には至る所にたこ焼き屋がありましたが、圧倒的な安さでした。じゃあここで食べてみよう、と列に並びましたがすでに 10 人ほどが並んでいて、どうやら人気店のようでした。（後で調べると食べログで星 3.4 でした）このお店は食券方式で列に並ぶ前に食券を買うルールで、私たちは 3 人で 14 個入りをシェアすることにしました。

▶私が並んでいる間にも次々と人が並び、行列が絶えることはなかった

おそらく 20 分ほど並び、たこ焼きをゲット。ソースや青のりなどのトッピングはセルフサービスで好きなだけかけることができます。ここのたこ焼きは柔らかい生地の中に揚げ玉が多めで歯ごたえが楽しく、スナック感覚で食べられました。個人的には京都の九条ネギ入りのたこ焼きのほうが好みでしたが、また違った味わいで美味しかったです。

Ⅲ 鯛焼き

そろそろ甘いものが食べたい、ということでバスから見えていた鯛焼き屋を目指すことに。『天然たいやき　鳴門鯛焼本舗』です。

天然鯛焼きって何だろう？とバスの中で話題になっていたのですが、公式サイトを調べると「一匹ずつ丁寧に焼く一丁焼きという製法」のことだそうで、効率は悪くても伝統的な製法にこだわっているそうです。確かに鯛焼き屋は北海道にも多くありますが、何匹も一度に焼ける焼き型を使用しているお店が多い気がします。

味は小豆と金時芋の 2 種、他に最中でアイスと小豆を挟んだものも販売していました。今回は珍しさに魅かれて金時芋を注文。金時芋の甘さが美味しく、お好み焼きのソースの後には嬉しかったです。道頓堀に甘いスイーツ系が少ないのでお勧めです。このお店は関東にも進出しているので東京の浅草や日本橋などでも食べることができます。

Ⅳ 串カツ

集合時間も近づいてきたところで、ギリギリで串カツを食べることにしました。今回食べたお店は屋台スタイルで、店先にテーブルがあり外で食べることもできますし、食べ歩きにも最適でした。時間も無く、お腹もかなり充たされていたので蓮根串の 1 本だけ注文。

出てきたのは紙コップに入れられた蓮根串。食べ歩きするには嬉しい配慮です。
もちろん注文してから揚げてくれるのでアツアツ。やっぱり揚げたては何でも美味しいと実感しました。

Ⅴ 黒門市場

最後に紹介するのは黒門市場（くろもんいちば）です。ここでは何も食べなかったのですが（お腹いっぱいすぎて）、歩いているだけで楽しかったのでお勧めです。この市場は観光客もいますが、地元の方も多く、大阪弁のやり取りを聞くことができました。

黒門市場は通商「大阪の台所」と呼ばれる大市場で、道頓堀から徒歩で向かうことができます。総延長 580 メートルの通りには様々な店が 180 店ほど軒を連ねています。京都の錦市場とはまた違う雰囲気で異なる魅力を持っています。錦市場と黒門市場を比較すると、食べ歩きだけではなく、京都と大阪の文化の違いも楽しむことができると思います。

▸この門が目印。大阪のド派手な看板はここにはなかった

5　研修旅行を終えて

研修旅行に際して、①フィールドワークの方法を実地に即して身につける。②日本文化および文化の多様性について理解を深める、という二つの学習目標が設定されていました。この二つの目標と照らし合わせながら、今回の旅行について振り返ってみたいと思います。

まずは①の「フィールドワーク」についてですが、自主研修では博物館の観覧や観光地を訪れることをメインとし、文化の違いを肌で感じることを重視しました。そのため、アンケート調査や聞き取り調査は行いませんでしたが、数多くの優れた文化財を自分の目で見ることができたので大変満足しています。京都には高校の修学旅行で一度訪れたことがありましたが、そのときとは比べ物にならないほど京文化の持つ繊細さや伝統の美しさに感動し、歴史の持つ重みや諸行無常だからこそ美しい月日の流れをなんとなくではありますが理解できた気がします。

今回の研修旅行でフィールドワークの方法を身につけることができたかは自信がありませんが、充実した研修を行うことができたと思います。

次に②の「文化理解を深める」ですが、この目標は達成できたと思います。上述しておりますが、文化の美しさを感じることができたのは私にとって大きな喜びで、この旅行の最大の収穫でした。

人間というものは歳を重ねるごとに同じ景色であったとしても、見えるものや感じるものが日々変化します。また、時代の流れとともに風潮や価値観も変わるでしょう。そんな中でも、人間が変わらず残そうとしてきたものが年月を経て「伝統」になっていくのだと思います。人類がそのように築き上げてきた「伝統」から今を生きる私たちは何かを学ばなければならないし、この先も伝えていく責任があると改めて強く感じました。

研修旅行についてはこの最終レポートで一区切りつく形となりますが、今回感じたものを忘れずに自分なりに学び続けていこうと思います。

最後に、本来この関西研修旅行は日本文化学科の学生のみが参加できるそうですが、今回は特別に中川かず子先生にお誘いをいただき、一人だけ他学部からの参加となりました。そのため特に最後のプレゼン発表はとても興味深く、日文のゼミナールを覗いているようで新鮮でした。このような機会はめったにありませんので、お誘いくださった中川先生や引率の寺田先生、受け入れてくれた学生の皆さんにお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

参照文献

道頓堀公式ホームページ

天然鯛焼き

日本史総覧（とうほう）

京ガイドＰＬＵＳ　ＴＡＢＩ　ＧＵＩＤＯ

神戸公式観光サイト　Ｆｅｅｌ　ＫＯＢＥ

ブリタニカ百科

神戸旧居留地公式ホームページ

京都国立博物館公式ホームページ

平成27年度 日本文化特別演習報告書 第5号

発行日　平成28年3月31日
発　行　北海学園大学人文学部
印　刷　株式会社アイワード